

2008

長崎県雲仙市教育委員会

雲仙市文化財調査報告書 第3集

ryuo  
**龍王遺跡Ⅲ**

(縄文時代・古墳時代編)

-国見中部地区県営圃場整備事業に伴う発掘調査-



## 発行にあたって

このたび平成16年度に実施しました、国見中部地区圃場整備事業に伴う龍王遺跡の緊急発掘調査の報告書を発行することになりました。当市は平成17年10月11日(10月11日)に7町(国見町・瑞穂町・吾妻町・愛野町・千々石町・小浜町・南串山町)が合併して誕生しました。「豊かな大地・輝く海とふれあう人々で築くたくましい郷土」の実現に向けて地域の発展を目指しています。

龍王遺跡の所在する雲仙市国見町は、島原半島の北端に位置し、これまでにも多くの遺跡が発見されています。昨年、一昨年と国見中部地区県営圃場整備事業に伴う発掘調査の報告(概報)を行ってまいりました。旧石器時代の人類の生活跡や新たに発見された前方後円墳など、長い間脈々と営まれた農耕地の下に埋蔵されていた古代人の息吹が、発掘調査によって目を覚ましたことになります。昨年の報告では、鹿児島の火山から噴出された「姶良Tn火山灰」が厚く堆積した状況も見られ、今も昔も噴火災害に立ち向かう人々の姿がしげれます。遺跡南側にそびえる雲仙普賢岳は現在目立った活動を見せておりませんが、頂上付近には平成新山と名付けられた溶岩ドームが噴火災害の生きしさを今に伝えています。北側に目を移せば、眼下には有明海が広がり、佐賀県・福岡県・熊本県までも一望することができます。

今報告では主に、龍王遺跡で発見された弥生時代～古墳時代にかけての住居跡群と縄文時代の遺物・遺構を報告します。特に龍王遺跡で発見された古墳時代初頭の土器群は県内でも未だ発見数の少ない「二重口縁壺」を多く含むもので、当時の他地域との交流関係を旨とする上で欠かせない資料となるでしょう。また、同時に発見された「豪族居館」と考えられる方形環溝は県内では初例であり、これまた当時の地域の歴史を解明する上で鍵となる資料になることは間違いありません。その他、まだまだ多くの遺構・遺物が発見されておりますが、その全てを報告するにはまだまだ時間が足りません。今後も出土資料の整理を進め貴重な文化遺産の保護に努めてまいりたいと考えております。

雲仙市の緑豊かな農業地帯も、近年の農業基盤整備に伴い大きく変貌しております。このような情勢の中で、祖先の貴重な文化遺産を保護し、これを後世に伝えることは、私たちに譲せられた重要な責務であります。本市では、このような事態に対処するため、遺跡発掘調査を行い保存・保護に努めてまいりました。調査の成果を公開する一つの手立てとして報告書を作成いたしましたが、遺跡の宝庫といわれる本市にとりまして今報告は、貴重な歴史と文化を理解するうえで大きな役割を果たすものと期待しております。

最後になりましたが、今回の調査に当たり、地元地権者の皆様、工事関係者の皆様、大学・博物館関係の諸先生方ならびに長崎県学芸文化課の皆様のご指導に衷心より感謝申し上げ、発行のことばといたします。

平成20年3月31日

長崎県雲仙市教育委員会

教育長 鈴山勝利

## 例　　言

1 本報告は平成16年度（2004年～2005年）に実施した国見中部地区県営圃場整備事業に伴う長崎県南高米郡国見町（現長崎県雲仙市国見町）に所在する龍王遺跡の緊急発掘調査の報告である。

2 調査は国見町教育委員会（現雲仙市教育委員会）が担当した。

発掘調査は下記の期間実施した。

2004年8月3日～2005年3月13日 龍王遺跡5区・12区～31区・拡張区・倉地川地区

3 調査体制は次のとおりである。

調査主体	国見町教育委員会	教　育　長	原　　宮之
		教　育　次　長	吉田　正昭
		社会教育係長	柴崎　孝光
調査担当		社会教育係	辻田　直人
		文化財調査員	竹中　哲朗（現長崎県諫早市役所）
		文化財調査員	松崎　由紀子（試掘調査）
現　体　制	雲仙市教育委員会	教　育　長	鈴山　勝利
		教　育　次　長	辻　政実
		生涯学習課長	和田　実
		文化財班班長	柴崎　孝光
		主　　査	江崎　亮太
		主　　査	辻田　直人
		文化財調査員	山下　美郷・小野　綾夏・益田　聰明

4 現地での遺構・遺物の実測は東　文子・林　繁美・寺中典子・徳永美也子・深水聰子・福田次郎・竹田将仁・竹中・辻田が行い、遺物の接合・復元は柳原亜矢子が、遺物の実測は早稲田一美・柳原亜矢子・林田　崇・辻田・小野が、トレイスは早稲田一美が行った。また、図版の編集・作成は早稲田一美・柳原亜矢子・林田　崇・辻田・小野が行い、写真は現地調査を竹中・辻田が、遺物写真は早稲田一美・柳原亜矢子・辻田・小野が行った。

裏表紙及びAbstractの英訳については、生涯学習課　吉田奈央による。

5 遺構・遺物実測の一部は㈱埋蔵文化財サポートシステムに委託した。

6 年代測定業務は㈱古環境研究所に委託した。

7 空中写真撮影業務は㈱九州文化財研究所に委託した。

8 本遺跡の遺物及び写真・図面等は雲仙市国見神代小路歴史文化公園歴史民俗資料館で保管している。

9 本書で用いた方位はすべて真北であり、国土座標は世界測地系による。

10 現地調査および本書の刊行にあたって多くの方々からご助言いただいた、記して謝意を表します。柳沢一男（宮崎大学教授）、蒲原宏行（佐賀県立博物館・美術館）、田中裕介（大分県教育委員会）、久住猛雄（福岡市教育委員会）、吉田和彦（大分県杵築市教育委員会）、早田　勉（㈱古環境研究所）、宮崎貴夫（長崎県教育委員会）、古門雅高（長崎県教育委員会）、渡邊康行（㈱埋蔵文化財サポートシステム）、本田秀樹（長崎北高等学校）、山口勝也（㈱埋蔵文化財サポートシステム）、宇土靖之（長崎県島原市役所）、長崎県教育委員会、㈱野田建設、㈱星野建設、㈱有明建設、㈲織田建設（順不同）

11 本書の執筆・編集は辻田直人・小野綾夏が分担し、各章及び各節文末に執筆者名を記した。

12 本書の編集は辻田・小野による。

# 目 次

巻頭図版

発行にあたって

例言

本文目次

挿図目次

表目次

図版目次

第1章 調査の経緯 ..... 1 p

第1節 発掘調査にいたる経緯（辻田） 第2節 発掘調査の方法及び経過（辻田）

第3節 遺跡の地理的・地形的環境（辻田）

第2章 基本土層 ..... 3 p

第1節 龍王遺跡の基本土層（辻田）

第3章 龍王遺跡 ..... 5 p

第1節 おとし穴状遺構（辻田） 第2節 繩文時代早期遺物（辻田）

第3節 弥生時代終末～古墳時代初頭住居跡群（辻田・小野）

第4節 古墳時代方形環溝（豪族居館）（辻田・小野）

第4章 自然科学分析 ..... 146 p

第1節 放射性炭素年代測定

第5章 総 括 ..... 148 p

第1節 概要（辻田）

第2節 まとめ（辻田・小野）

## 挿 図

- 第1図 遺跡位置図(1/25,000) ..... 2  
 第2図 調査区配置図(1/10,000) ..... 2  
 第3図 基本土層図(13区)(1/50) ..... 3  
 第4図 3区・4区おとし穴状遺構検出状況(1/200) ..... 4  
 第5図 4区基本土層図(1/25) ..... 5  
 第6図 3区・4区おとし穴状遺構(SX-1)(1/20) ..... 6  
 第7図 3区・4区おとし穴状遺構(SX-2)(1/20) ..... 7  
 第8図 3区・4区おとし穴状遺構(SX-3)(1/20) ..... 8  
 第9図 3区・4区おとし穴状遺構間連遺構(SX-4・SX-5)(1/20) ..... 9  
 第10図 3区・4区おとし穴状遺構間連遺構(SX-6)(1/20) ..... 9  
 第11図 3区・4区おとし穴状遺構(SX-7・SX-8)(1/20) ..... 10  
 第12図 倉地川地区検出の主な遺構(1/400) ..... 12  
 第13図 倉地川地区基本土層図(1/50) ..... 12  
 第14図 倉地川地区風倒木痕1出土繩文土器(SX-1)(1/3) ..... 13  
 第15図 倉地川地区風倒木痕2出土繩文土器(SX-2)(1/3) ..... 14  
 第16図 倉地川地区出土繩文土器(捺糸文)(1/3) ..... 15  
 第17図 倉地川地区出土繩文土器(山形)(1/3) ..... 16  
 第18図 倉地川地区出土繩文土器(小さい捲口)(1/3) ..... 17  
 第19図 倉地川地区出土繩文土器(やや粗大な捲口)(1/3) ..... 18  
 第20図 倉地川地区出土繩文土器(粗大な捲口)(1/3) ..... 19  
 第21図 倉地川地区出土繩文土器(その他)(1/3) ..... 20  
 第22図 倉地川地区出土繩文時代石器(石椎)(2/3) ..... 21  
 第23図 倉地川地区出土繩文時代石器(石礫)(2/3) ..... 22  
 第24図 倉地川地区出土繩文時代石器(石匙)(2/3) ..... 22  
 第25図 倉地川地区出土繩文時代石器(石斧)(2/3) ..... 23  
 第26図 12区～15区・並列及び方形環遺構配図(1/50) ..... 25  
 第27図 14区SB-4検出状況(1/100) ..... 26  
 第28図 14区SB-4遺物出土状況(1/50) ..... 27  
 第29図 14区SB-4出土土器(壺・壺)(1/3) ..... 28  
 第30図 14区SB-4出土土器(壺)(1/3) ..... 29  
 第31図 14区SB-4出土土器(1/3) ..... 30  
 第32図 14区SB-4出土石器(砥石)(1/4) ..... 30  
 第33図 14区SB-4、13区・14区SB-5、13区・  
14区SB-6切り合い状況(1/100) ..... 31  
 第34図 13区・14区SB-5検出状況(1/100) ..... 32  
 第35図 13区・14区SB-5遺物出土状況(1/50) ..... 33  
 第36図 13区・14区SB-5出土土器(壺他)(1/3) ..... 34  
 第37図 13区・14区SB-5出土土器(壺台・高坏)(1/3) ..... 35  
 第38図 13区・14区SB-6検出状況(1/100) ..... 36  
 第39図 13区・14区SB-6遺物検出状況(1/50) ..... 37

## 目 次

- 第40図 13区・14区SB-6出土土器(壺)(1/3) ..... 38  
 第41図 13区・14区SB-6出土土器(壺台)(1/3) ..... 39  
 第42図 13区・14区SB-6出土土器(高坏)(1/3) ..... 40  
 第43図 13区・14区SB-6出土土器(壺)(1/3) ..... 40  
 第44図 13区・14区SB-6出土土器(鉢・手捏ね)(1/3) ..... 41  
 第45図 13区・14区SB-6出土石器(斧状石器・砥石)  
(1/4・1/3) ..... 41  
 第46図 13区SB-7検出状況(1/100) ..... 42  
 第47図 13区SB-7遺物出土状況(1/50) ..... 43  
 第48図 13区SB-7出土土器(1/3) ..... 43  
 第49図 13区SB-3、12区・13区SB-2検出状況(1/100) ..... 44  
 第50図 13区SB-3遺物出土状況(1/50) ..... 45  
 第51図 13区SB-3出土土器(台付壺)(1/3) ..... 46  
 第52図 13区SB-3出土土器(壺・壺)(1/3) ..... 47  
 第53図 13区SB-3出土土器(高坏・鉢)(1/3) ..... 47  
 第54図 14区SB-1検出状況(1/100) ..... 48  
 第55図 14区SB-1遺物検出状況(1/50) ..... 49  
 第56図 14区SB-1出土土器(台付壺)(1/3) ..... 50  
 第57図 14区SB-1出土土器(壺・紡錘車・壺台)(1/3) ..... 51  
 第58図 14区SB-1出土土器(高坏・鉢)(1/3) ..... 52  
 第59図 14区SB-1出土石器(磨製石斧)(1/3) ..... 53  
 第60図 14区SB-2検出状況(1/100) ..... 54  
 第61図 14区SB-2遺物出土状況(1/50) ..... 55  
 第62図 14区SB-2出土土器(壺・壺)(1/3) ..... 56  
 第63図 14区SB-2出土土器(小型丸底土器)(1/3) ..... 57  
 第64図 14区SB-2出土土器(台付壺)(1/3) ..... 58  
 第65図 14区SB-2出土土器(鉢)(1/3) ..... 58  
 第66図 14区SB-2出土土器(壺台他)(1/3) ..... 59  
 第67図 14区SB-2出土石器(砥石)(1/4) ..... 59  
 第68図 12区SB-1検出状況(1/100) ..... 60  
 第69図 12区SB-1遺物出土状況(1/50) ..... 61  
 第70図 12区SB-1出土土器(壺)(1/3) ..... 62  
 第71図 12区SB-1出土土器(壺他)(1/3) ..... 63  
 第72図 12区SB-1出土土器(高坏)(1/3) ..... 64  
 第73図 12区SB-1出土土器(台付壺)(1/3) ..... 64  
 第74図 12区SB-1出土土器(鉢)(1/3) ..... 65  
 第75図 12区SB-1出土土器(胴部片)(1/3) ..... 65  
 第76図 12区SB-1出土土器(1/3) ..... 65  
 第77図 12区SB-1出土土器(壺台)(1/3) ..... 65  
 第78図 13区SB-8検出状況(1/100) ..... 66

第79図	13区SB-8遺物出土状況(1/50).....	67
第80図	13区SB-8出土土器(1/3) .....	67
第81図	14区SB-3出土土器(1/3) .....	68
第82図	22区SB-2出土土器(1/3) .....	69
第83図	22区SB-3出土土器(1/3) .....	69
第84図	22区SB-4出土土器(1/3) .....	70
第85図	拡張区SB-1サブトレ出土土器(1/3) .....	71
第86図	拡張区SB-1出土石器(砾石)(1/3) .....	71
第87図	5区SB-1実測図及び遺物出土状況(1/50) .....	72
第88図	5区SB-1出土遺物(甕・小型丸底土器)(1/3) .....	73
第89図	5区SB-1出土石器(石斧)(1/3) .....	73
第90図	方形環溝検出状況(1/200) .....	74
第91図	方形環溝断面図及び環溝内分布検出状況(1/50) .....	75
第92図	方形環溝遺物出土状況(30区)(1/25) .....	76
第93図	方形環溝出土土器(台付甕)(1/3) .....	78
第94図	方形環溝出土土器(甕①)(1/3) .....	79
第95図	方形環溝出土土器(甕②)(1/3) .....	81
第96図	方形環溝出土土器(甕③)(1/3) .....	82
第97図	方形環溝出土土器(甕④)(1/3) .....	85
第98図	方形環溝出土土器(甕⑤)(1/3) .....	87
第99図	方形環溝出土土器(甕⑥タタキ)(1/3) .....	89
第100図	方形環溝出土土器(甕⑦波状文)(1/3) .....	90
第101図	方形環溝出土土器(甕⑧直線文)(1/3) .....	91
第102図	方形環溝出土土器(甕⑨)(1/3) .....	92
第103図	方形環溝出土土器(甕⑩)(1/3) .....	93
第104図	方形環溝出土土器(甕⑪)(1/3) .....	95
第105図	方形環溝出土土器(甕⑫)(1/3) .....	97
第106図	方形環溝出土土器(甕⑬)(1/3) .....	99
第107図	方形環溝出土土器(甕⑭)(1/3) .....	101
第108図	方形環溝出土土器(甕⑮畿内系二重口縁)(1/3) .....	103
第109図	方形環溝出土土器(甕⑯山陰系二重口縁)(1/3) .....	105
第110図	方形環溝出土土器(甕⑰二重口縁)(1/3) .....	106
第111図	方形環溝出土土器(甕⑲広口甕)(1/3) .....	107
第112図	方形環溝出土土器(甕⑳広口甕)(1/3) .....	108
第113図	方形環溝出土土器(甕㉑広口甕)(1/3) .....	110
第114図	方形環溝出土土器(甕㉒広口甕)(1/3) .....	111
第115図	方形環溝出土土器(甕㉓・甕㉔)(1/3) .....	112
第116図	方形環溝出土土器(甕㉕)(1/3) .....	113
第117図	方形環溝出土土器(甕㉖小型甕)(1/3) .....	114
第118図	方形環溝出土土器(小型丸底土器)(1/3) .....	115
第119図	方形環溝出土土器(鉢①手捏ね)(1/3) .....	116
第120図	方形環溝出土土器(鉢②)(1/3) .....	117
第121図	方形環溝出土土器(器台)(1/3) .....	118
第122図	方形環溝出土土器(高坏①)(1/3) .....	119
第123図	方形環溝出土土器(高坏②)(1/3) .....	121
第124図	龍王遺跡・住居跡出土土器の変遷(1/12) .....	153
第125図	龍王遺跡方形環溝出土土器の変遷(1/12) .....	155
第126図	110頁第113図366線刻のある土器(1/3) .....	156

## 表 目 次

第1表	3区・4区おとし穴状遺構計測表.....	11
第2表	倉地川地区縄文時代早期土器観察表	123
第3表	倉地川地区縄文時代石器観察表...	124
第4表	14区SB-4出土土器観察表.....	125
第5表	13区・14区SB-5出土土器観察表...	125
第6表	13区・14区SB-6出土土器観察表...	125
第7表	13区SB-7出土土器観察表.....	126
第8表	13区SB-3出土土器観察表.....	126
第9表	14区SB-1出土土器観察表.....	127
第10表	14区SB-2出土土器観察表.....	128
第11表	12区SB-1出土土器観察表.....	129
第12表	13区SB-8出土土器観察表.....	130
第13表	14区SB-3出土土器観察表.....	130
第14表	22区SB-2出土土器観察表.....	130
第15表	22区SB-3出土土器観察表.....	130
第16表	22区SB-4出土土器観察表.....	131
第17表	拡張区SB-1出土土器観察表.....	131
第18表	5区SB-1出土土器観察表 .....	131
第19表	弥生時代～古墳時代住居跡出土石器観察表	131
第20表	方形環溝(30区)出土土器観察表	132～145

## 図版目次

中表紙図版 遺跡上空より有明海を望む（右上建物は雲仙市立国見中学校）

卷頭図版① 調査区全景（手前は市立国見中学校） 住居跡調査風景 土層堆積状況

卷頭図版② 方形環溝検出状況 環溝内土器出土状況 環溝断面検出状況

卷頭図版③ 13区～15区住居跡検出状況 検出状況 14区SB-4検出状況

卷頭図版④ 弥生時代終末～古墳時代初頭の土器集合写真

### 図版 1

遺跡上空写真(昭和35年国土地理院)

住居群調査風景(最奥は14区SB-1・手前は13区SB-3)

住居群調査風景(手前は14区SB-4)

14区SB-4と13区・14区SB-5切り合い状況(31頁第33図)

13区・14区SB-6と13区SB-7遺物検出状況

### 図版 2

倉地川地区発見時の状況

風倒木 1 検出状況(12頁第12図)

風倒木 1 出土土器(13頁第14図1)

包含層出土土器(17頁第18図42)

包含層出土石器(21頁第22図1)

おとし穴状遺構(SX-1)検出状況(6頁第6図)

おとし穴状遺構(SX-1)半裁状況(6頁第6図)

おとし穴状遺構(SX-3)検出状況(8頁第8図)

### 図版 5

13区SB-3調査状況(45頁第50図)

12区SB-1完掘状況(60頁第68図)

14区SB-2検出状況(55頁第61図)

14区SB-2調査状況(55頁第61図)

14区SB-2完掘状況(54頁第60図)

5区SB-1遺物検出状況(72頁第87図)

5区SB-1柱穴検出状況(72頁第87図)

5区SB-1完掘状況(72頁第87図)

### 図版 3

おとし穴状遺構(SX-3)半裁状況(8頁第8図)

おとし穴状遺構(SX-3)底面ピット検出状況(8頁第8図)

おとし穴状遺構(SX-3)底面ピット検出状況(8頁第8図)

おとし穴状遺構(SX-6)検出状況(9頁第10図)

おとし穴状遺構(SX-6)半裁状況(9頁第10図)

おとし穴状遺構(SX-2)底面ピット検出状況(7頁第7図)

おとし穴状遺構(SX-2)底面中央ピット半裁状況(7頁第7図)

おとし穴状遺構(SX-2)小ピット内杭復元状況(7頁第7図)

### 図版 6

方形環溝検出状況(右が新しい環溝)(74頁第90図)

方形環溝断面(C)検出状況(74頁第90図)

方形環溝検出状況(1号環溝陸橋部分)(74頁第90図)

方形環溝断面(D)検出状況(74頁第90図)

方形環溝検出状況(G)(74頁第90図)

方形環溝とその他の溝状遺構の切り合い状況(74頁第90図)

方形環溝完掘状況(76頁第92図)

方形環溝と切り合う溝の断面

### 図版 4

13区～14区住居跡検出状況(26頁～41頁)

12区～13区住居跡検出状況(44頁～47頁・60頁～65頁)

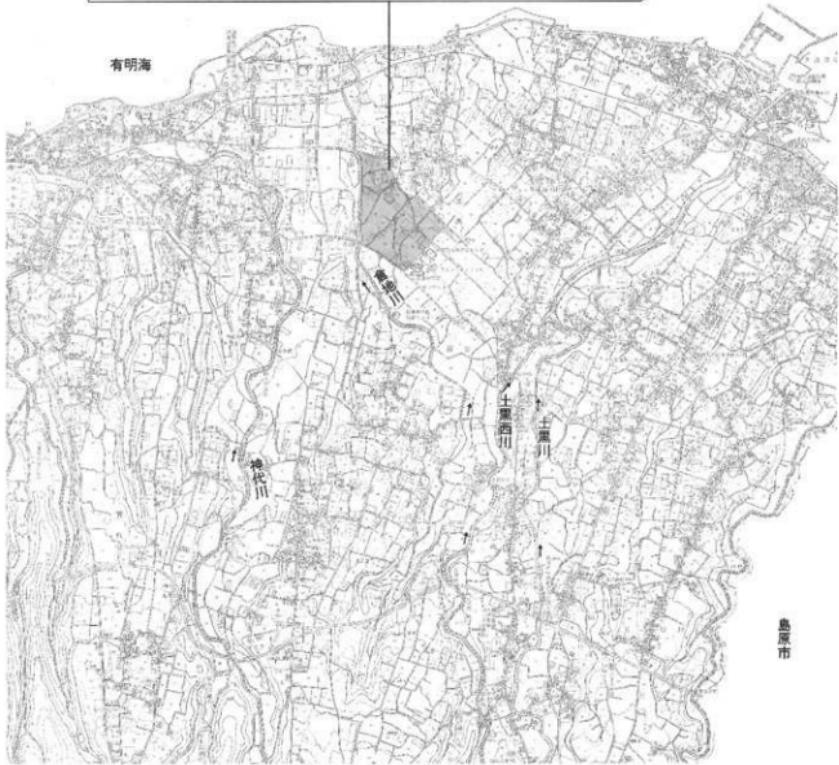
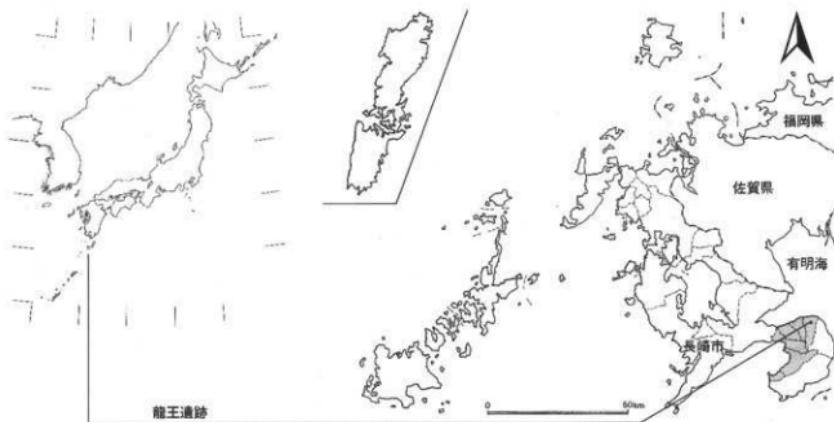
12区・13区SB-2及び13区SB-3検出状況(44頁～47頁)

12区・13区SB-2完掘状況(44頁第49図)

### 図版 7

縄文土器 第14図1～第16図25

図版8	図版20
縄文土器 第17図26～第19図63	弥生時代～古墳時代土器 第103図296～第107図331
図版9	図版21
縄文土器 第19図64～第21図94	弥生時代～古墳時代土器 第107図332～第113図365
図版10	図版22
弥生時代～古墳時代土器 第29図1～第40図29	弥生時代～古墳時代土器 第113図366～第119図410
図版11	図版23
弥生時代～古墳時代土器 第40図30～第44図58	弥生時代～古墳時代土器 第119図411～第123図463
図版12	図版24
弥生時代～古墳時代土器 第48図61～第56図88	弥生時代～古墳時代土器 第123図464～480 第113図366線刻部分及び拡大
図版13	図版25
弥生時代～古墳時代土器 第56図89～第58図117	古墳時代出土土器①(庄内系壺) 古墳時代出土土器②(布留系壺)
図版14	図版26
弥生時代～古墳時代土器 第62図119～第70図148	古墳時代出土土器③(二重口縁壺) 古墳時代出土土器④(直口壺)
図版15	図版27
弥生時代～古墳時代土器 第70図149～第80図183	古墳時代出土土器⑤(小型土器等) 古墳時代出土土器⑥(高坏・器台)
図版16	図版28
弥生時代～古墳時代土器 第81図184～第88図215	倉地川地区縄文時代石器(縮尺2/3) 弥生時代～古墳時代住居跡出土石器(縮尺1/3)
図版17	図版29
弥生時代～古墳時代土器 第88図216～第96図243	弥生時代～古墳時代住居跡出土石器(縮尺1/3)
図版18	
弥生時代～古墳時代土器 第96図244～第98図268	
図版19	
弥生時代～古墳時代土器 第99図269～第103図295	



第1図 遺跡位置図 (1/25,000)

# 第1章 調査の経緯

## 第1節 発掘調査にいたる経緯

平成8年度に長崎県島原振興局より、国見中部地区県営圃場整備事業の計画があるとの紹介を受け、国見町教育委員会が主体となり平成9年度及び平成10年度に事業予定地内の遺跡範囲確認調査を実施した。その結果、石原遺跡・矢房遺跡（平成9年度）、龍王遺跡・猪ノ口遺跡・真正寺条里跡（平成10年度）の5遺跡が新たに発見された。島原振興局・国見町産業振興課・土黒地区土地改良区・国見町教育委員会による協議の結果、設計変更により大部分は盛土により保存を行うこととなったが、遺跡の消滅する部分について全面発掘調査を実施することとなった。本調査は平成10年度より順次行い、平成18年度において全ての調査区の調査が完了した。今報告では龍王遺跡で検出された遺物・遺構の一部を報告する。調査は長崎県島原振興局より委託を受けて行ったものである。（辻田）

## 第2節 発掘調査の方法及び経過（第1・2図）

本調査は世界測地系を使用し、調査対象範囲（排水路建設及び圃場造成のために遺跡の消滅する範囲）を20mメッシュに区切り順次調査を実施した。しかしながら、調査区の立地条件などにより、必ずしも20mメッシュの調査区とはなっていない。今報告における調査カ所は龍王遺跡3区～5区、12区～31区、倉地川地区及び抵張区である。

龍王遺跡は概ね水田として利用されており、これまでにも数度の造成工事が実施されている。したがって、表土を除去すると遺物包含層がまったく存在せず基盤層に掘り込まれた遺構確認面が露出する部分も少なくない。調査では重機により表土を除去したあと、遺構確認面または遺物包含層上面まで再度重機により掘削を行っている。その後の掘削作業は概ね人力による。

遺物については、包含層遺物は一括で取上げ、住居跡など遺構に関わるものについては可能な限り実測し取上げた。また、縄文時代の遺物については調査期間の都合で一部グリッド・層位一括で取上げている。以下調査の概要を述べる。

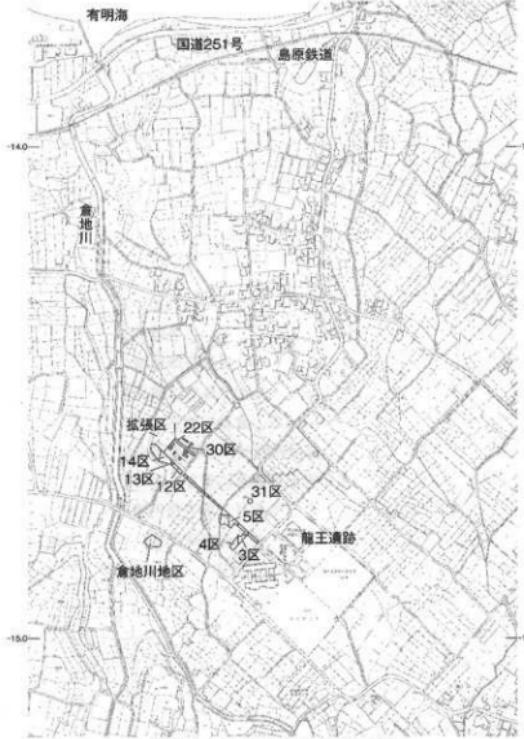
龍王遺跡からは旧石器時代～古墳時代までの多種・多様な遺構・遺物が検出されている。縄文時代及び弥生時代終末～古墳時代初頭については今報告で述べるため説明を省くが、各時代の特徴的な事柄を述べる。旧石器時代はATを境に6時期の遺物が検出されており、有明海沿岸地域の旧石器時代の歴史解明に重要な資料と考えられる（辻田2007）。特に、これまで島原半島では検出例の少なかつたAT下位の石器群がまとめて検出されたことは大きな成果である。倉地川地区では方形周溝墓や前方後円墳が検出されている（竹中2006）。方形周溝墓の主体部は残存せず、周溝からの遺物も少ないため時期の特定が難しいが、県内では初の発見となる。その方形周溝墓に重なるように発見された前方後円墳からは、多量の6世紀後半の上師器・須恵器が検出されており、前方後円墳造営の最末期のものと考えられる。石室の石材等は後世の造成により消滅していたが、石室床面が辛うじて残存しており、鉄製品の検出も見られた。島原半島では雲仙市吾妻町に所在する「守山大塚古墳」（4世紀代）に次いで2基目の前方後円墳となる。（辻田）

### 【参考文献】

- 竹中哲朗・織田健吾 2006『龍王遺跡（倉地川古墳）』雲仙市文化財調査報告書（概報）第1集 長崎県雲仙市教育委員会  
辻田直人・竹中哲朗 2003『石原遺跡・矢房遺跡』国見町文化財調査報告書（概報）第3集 長崎県国見町教育委員会  
辻田直人 2005『石原遺跡Ⅱ』国見町文化財調査報告書（概報）第6集 長崎県国見町教育委員会  
辻田直人 2007『龍王遺跡Ⅱ・真正寺条里跡』雲仙市文化財調査報告書（概報）第2集 長崎県雲仙市教育委員会

### 第3節 遺跡の地理的・地形的環境（第1・2図）

龍王遺跡は島原半島の北側に広がる火山性山麓扇状地上に位置する。有明海に面した半島内でも最大規模な平野部にあり、古代条里の地割を今も良く残している。現在もそのほとんどが水田として利用されている。遺跡の広がる扇状地は、東端は土黒西川、西端は神代川によって侵食された雲仙山麓より伸びる細長い地形を呈し、断面形状は扁平な蒲鉾状をなす。土黒西川、神代川共に鳥甲山の北麓に谷頭をもち、ほぼ並走して有明海に向けて北流するが、標高15m付近の遺跡周辺で土黒西川は土黒川と合流し北東に向きを変え、神代川は大きく西側に蛇行する。遺跡の位置する平坦部は三角州状扇状地となっている。さらに、両川のほぼ中央に、有明海より南3kmほどに谷頭をもつ倉地川が北流し扇状地を東西に分断する。龍王遺跡は倉地川と土黒川の間に位置し、龍王遺跡は倉地川に沿って遺跡が形成されている。遺跡位置図や遺跡周辺の断面図（辻田2007）を見ると、今回報告する縄文時代や弥生時代終末～古墳時代初頭の遺物・遺構が検出された地点は、倉地川沿いの河岸上に位置している。断面図から、倉地川は小河川であるが、氾濫原がそれほど広くなく比較的安定した地域と考えられる。また、12区～15区の西側河岸直下では、弥生時代と考えられる河川跡も検出されており、河川に近く、かつ、増水時の影響を受けない微高地に遺跡が展開しているものと考えられる。これまで



第2図 調査区配置図 (1/10,000)

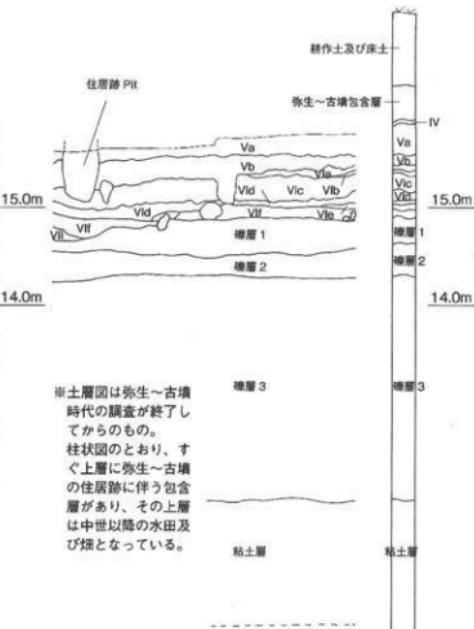
に報告を行ってきた、旧石器時代の出土地点や、前方後円墳、方形周溝墓についても同様で、倉地川東岸に分布する。また、倉地川をはさんで対岸には弥生時代中期後半～後期にかけての環濠集落（佃遺跡：圃場整備に伴う調査・辻田2008）も検出されている。この倉地川周辺では旧石器時代～中世にいたるまで島原半島内でも有数の遺跡群が検出されており、太古より人類の活動に適した立地であったことがうかがえる。これまで行ってきた圃場整備事業に伴う本調査や事前の試掘調査の成果からも、土黒川や神代川などの比較的大規模な河川に近づくにつれて、遺構・遺物の検出が希薄となっている。水害等により遺構・遺物が流出してしまったことも考えられるが、基本的には当時暮らしていた古代人たちが、水害時の危険を避け、「生活空間」として安定した環境を提供してくれる倉地川周辺を選択的に利用してきた結果であると考えられる。（辻田）

## 第2章 基本土層

### 第1節 龍王遺跡の基本土層

(第3図、巻頭図版①)

龍王遺跡の土層堆積は、立地が平坦な扇状地台地上のため比較的良好な堆積状況を示している。ただし、遺跡内のほとんどは水田として利用されており、古代以降の造成工事によってその大部分が削平を受けている。水田耕作土を除去するとすぐに最下層である第Ⅵ層が検出されることも多い。今回主に報告する弥生時代～古墳時代の調査区は、第3章第3節弥生時代終末～古墳時代初頭住居跡群部分と、第3章第4節古墳時代方形環溝部分では大きく土層が異なる。第3図では弥生～古墳の住居跡調査後の土層堆積実測図(13区)と基本土層の柱状図を示している。第3図に基づき13区の弥生時代終末～古墳時代初頭住居跡群部分について説明する。



第3図 基本土層図(13区)(1/50)

耕作土及び床土：厚い堆積で、現水田耕作土及びその床土。及び旧耕作土とその床土が厚く堆積する。  
弥生～古墳包含層：暗黒色土で粘りがある。下半分は住居跡内の覆土である。

第IV層：5YR-3/2(暗黒褐色)しまりがあり炭化物やオレンジ色土粒(K-Ah)を少量含む。また、5mm～5cm程の角閃石安山岩も少量含む。縄文時代の包含層であるが部分的にしか残存しない。

第V a層：75YR-3/2(黒褐色)しまりあるいは粘性が強い。オレンジ色土粒を少量含む。

第V b層：75YR-3/3(暗褐色)第V a層と同様だが若干粘性が弱まる。旧石器・縄文の包含層。

第VI a層：10YR-4/2(灰黄褐色)しまりはあるが第V a層～第V b層のような粘性は少なく、サクサクとした感じ。径1mm程の白色粒子を少量含み、また、炭化物粒を少量含む。

第VI b層：10YR-4/2(灰黄褐色)第VI a層と同様だが、やや硬くしまっている。

第VI c層：10YR-3/3(暗褐色)安山岩製の石器を包含する。非常に硬くしまっている。白色粒子や炭化物粒も多く見られる。また径2cm～3cm程の黄色土粒(AT)がまだら状に見られる。

第VI d層：10YR-3/4(暗褐色)やわらかく若干粘性を帯びるが、第VI a層～第VI c層と一連の土層と考えられる。炭化物や白色粒子が少くなり第VI d層に見られる黄色土粒(AT)が若干見られる。

第VI e層：10YR-3/4(暗褐色)第VI a層～第VI d層のような黄色土粒(AT)が見られず黒っぽく見える。部分的にしか見られず第VI a層～第VI d層までの一連の土層とは異なる印象を受ける。

第VI f層：75YR-4/4(褐色)非常に粘性の強い粘土である。調査区の中でも全面に広がっているわけではない。13区は旧河川沿いの部分であり、一時的に堆積した池や沼の堆積物と考えられる。

第VI a層：10YR-3/4(暗褐色)やや粘性がありしまりの良い土層。AT下位に見られる暗色帶か。

第VI b層：75YR-4/4(褐色)非常に硬い砂礫混じりの土層である。

第VI 層：75YR-4/4(褐色)粘性の強いしまった土層。百花台遺跡群に見られる第VI 層相当か。

礫層1：径1cm～5cmほどの角閃石安山岩層。非常に硬い。土砂も混入しており色調はやや黒っぽい。

礫層2：径5cm～人頭大程度の角閃石安山岩の円礫を含む。土砂をほとんど含まず礫層である。

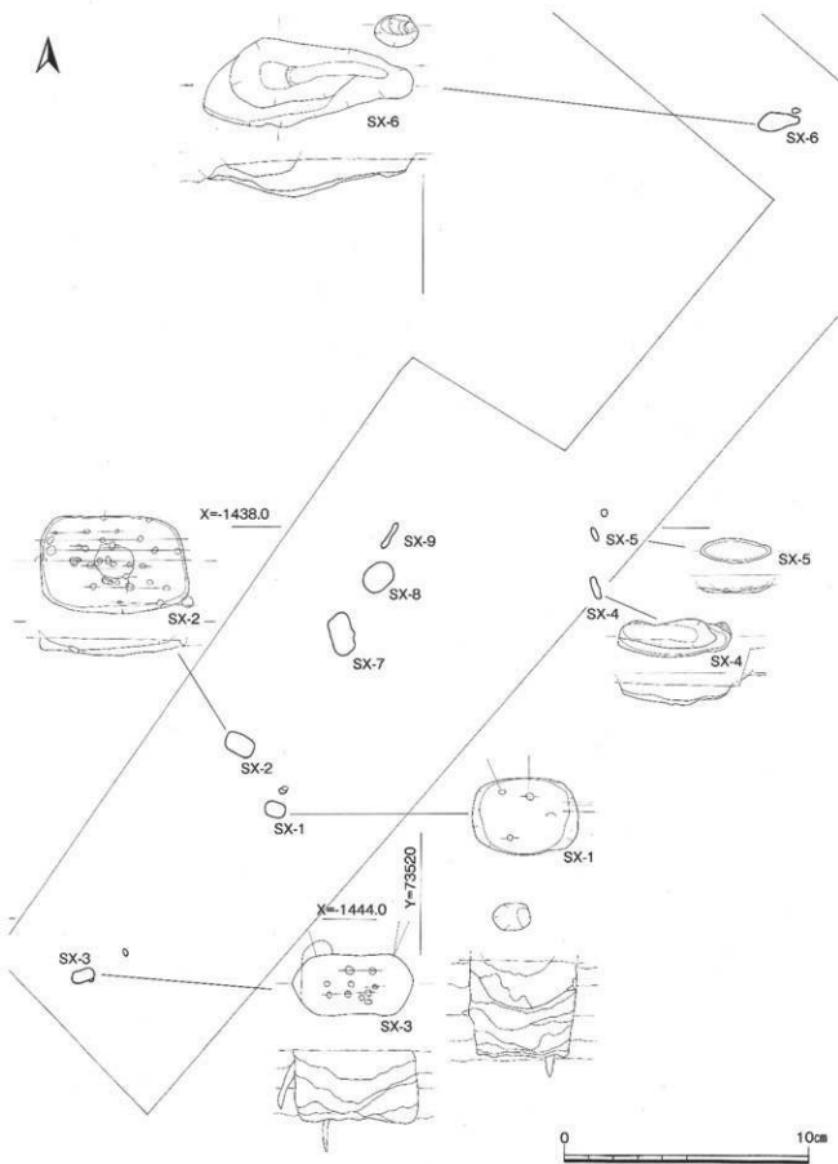
礫層3：人頭大を超える角閃石安山岩礫層。礫は風化が進んでおり非常にもらくなっている。

粘土層：白色的粘土層。重機による掘削でもその下層の検出には至らなかった。湧水が見られる。(辻田)

#### 【参考文献】

辻田直人 2007「龍王遺跡II・真正寺条里跡」雲仙市文化財調査報告書(概報) 第2集 長崎県雲仙市教育委員会

辻田直人 2008「佃遺跡」雲仙市文化財調査報告書(概報) 第4集 長崎県雲仙市教育委員会



第4図 3区・4区おとし穴状遺構他検出状況 (1/200)

# 第3章 龍王遺跡

## 第1節 おとし穴状遺構

### (1) 検出の状況（第4図・第5図、図版2・図版3）

3区・4区にかけておとし穴状遺構と考えられる土坑が検出されている。9基が検出されているが、その形状から2つのタイプに分かれる。1つはSX-1～SX-3・SX-7・SX-8のようにはば垂直に掘り込まれた隅丸長方形のもので、底面に小ピットを有するもの。もう1つはSX-4～SX-5・SX-8・SX-9のような不定形の長楕円形でレンズ状の掘り込みで、底面に小ピット等が見られないもの、である。いずれの土坑も内部の土層は同様のものであり、おおむね同じ時代の遺構と考えている。しかしながら、後者のような小ピットを持たないものもおとし穴状遺構と呼んでいいか疑問があるが、十園遺跡（辻田2004）でも同様の状況が見られていることもあり、ここでは同様に取り扱う。

3区・4区は水田として利用されていたため上層の土層がかなり削平されている。第5図に示すとおり水田耕作土より20cmほどでAT下位の石器群（第VII層：AT下位の暗色帶）が検出されている。土坑の検出面は第VII層が残存している部分では第VIII層上面であるが、第VIII層が露出している部分も多く見られ、検出の状況からはAT下位の石器群より新しい土坑であろう、としか言及できない。ただし、おとし穴状遺構掘削時には当然上位の土層が残存しているはずで、少なくとも1m以上の土層堆積があったであろうことから、旧石器時代以降、後述するが縄文早期以降の遺物が近隣で検出されており、縄文時代早期以降のおとし穴状遺構を考えるのが妥当であろうか。

第5図  
4区基本土層図

今回検出のおとし穴状遺構のすぐ脇に柱穴状の遺構が検出されているものがある。（1/25）

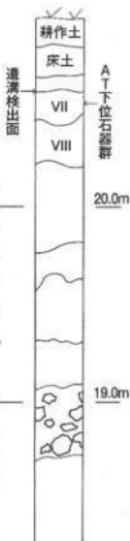
いずれもおとし穴状遺構と同様な遺構内の土層堆積であり、同時期のもの可能性もある。SX-6脇のものは内壁に階段状の痕跡が残っており、何度か掘りなおした（立て直した？）痕跡とも考えられる。おとし穴状遺構と同時に存在するか判断が出来ないため空想の域を脱しないが、おとし穴状遺構の場所を示す目印的なものが立っていた可能性も考えられよう。

調査方法：調査を行うに当たって、検出時におとし穴状遺構である可能性が高いと考えられたため、スライス調査を行うことを念頭に実施した。しかしながら予算と時間の都合によりSX-1～SX-3の3基のみである。いずれの土坑も、まず土坑内部の土層を半裁し、底面及び底面の小ピット、壁面を検出し、写真撮影と実測を実施した。次に、半裁した方の壁面外側にスライス調査用の試掘坑を設定し、おとし穴状遺構底面より50cmほど試掘底面を掘り下げた。次に半裁し残りの土層が残っている部分まで、底面及び壁面のスライス調査を実施した。底面にはおとし穴状遺構半裁時に検出されていたピットがあり、そのピットの掘り込み状況や新たなピットの検出を行った。その結果、ピットの消滅や新規ピットの検出が見られた。次に、半裁部分までスライスが終わると、おとし穴状遺構内部の土層に杭痕跡等が残存していないか、遺構内部の土層のスライス調査を行った。内部の土層をすべて掘り終えると、底面や底面の小ピット、壁面の遺構検出を行い、壁面にも遺構の痕跡が検出された。したがって、残り半分のスライス調査は底面のピットの確認と壁面の遺構の確認を行っている。

調査の結果、小ピットについては、上方からの検出では限界があるとともに、ピット痕跡ではない土層の「しみ」等を間違えて小ピット痕跡と捉えてしまう場合も考えられる。また、壁面にも思いのほか遺構と考えられる痕跡が残っており、上方からの検出ではかなりわかりづらいものであった。（辻田）

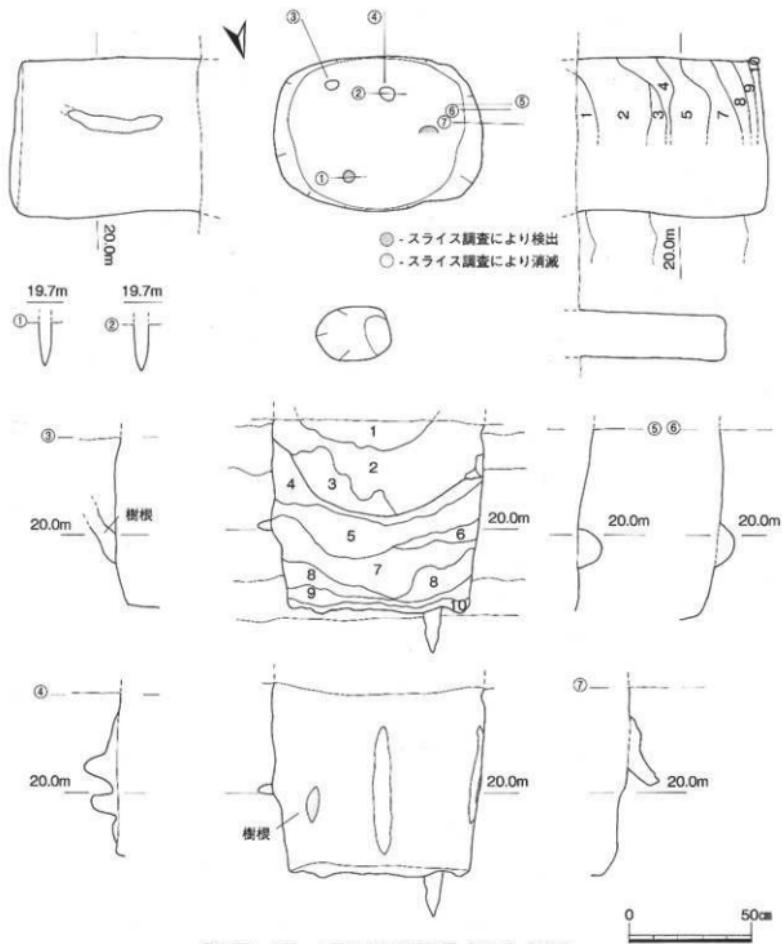
### 【参考文献】

辻田直人・竹中哲朗 2004『十園遺跡』国見町文化財調査報告書(概報) 第4集 長崎県国見町教育委員会

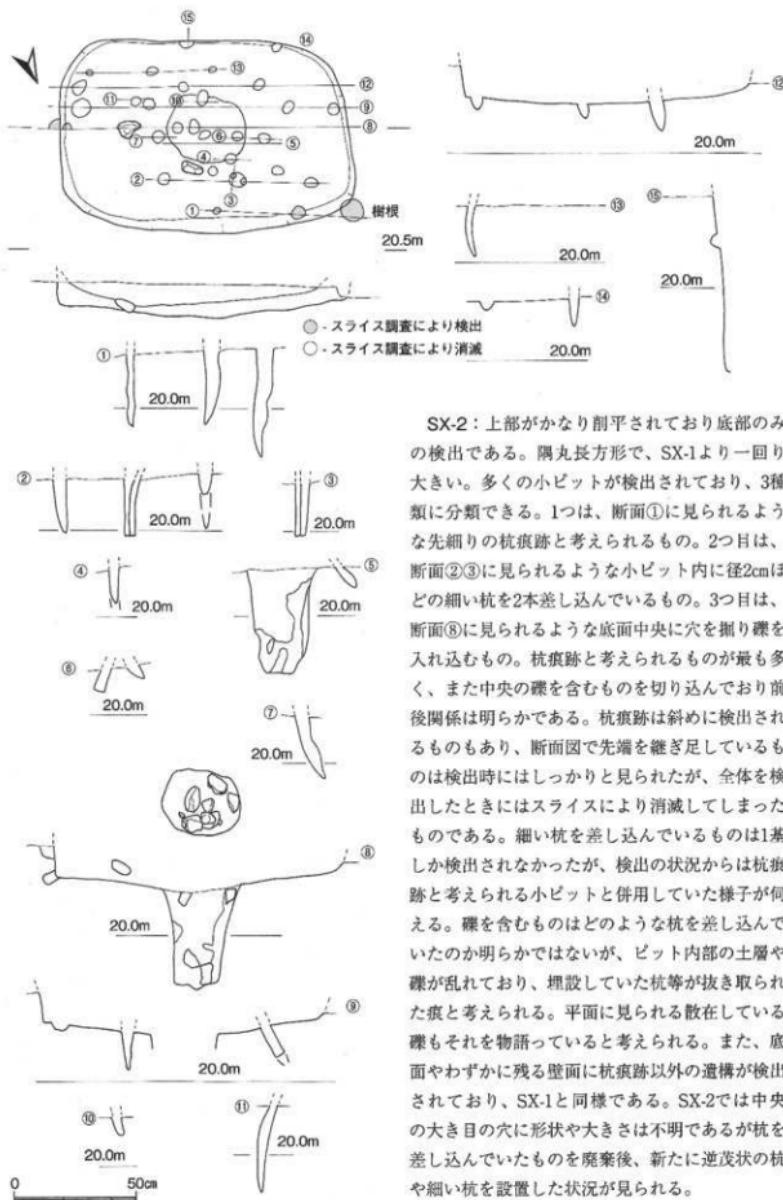


(2) 各遺構の説明 (第6図～第11図)

SX-1：平面形は短い隅長方形ではばば垂直に掘り込まれている。底面からは3基の小ピットが検出されているが、いずれも杭痕跡と考えられる先細り状のピットである。配置に規則性は見出せない。内部の土層堆積は明確に色調が変化するわけではないが、かなり細分が可能で、自然に時間をかけて堆積したものと考えられる。ただし、3層はブロック状の堆積であり、埋没時の壁面の崩落等によるものであろうか。安山岩製の石礫が出土している。底面付近にまれに見られるカモフラージュ用の植物性の堆積層は見られなかった。火山灰分析を実施（辻田2007）しており、アカホヤ火山灰降下以降の掘り込みであることが想定される。壁面にも掘り込みが検出されており、いずれも20cm程の掘り込みである。北側約50cmの所に柱穴状の遺構が検出されている。

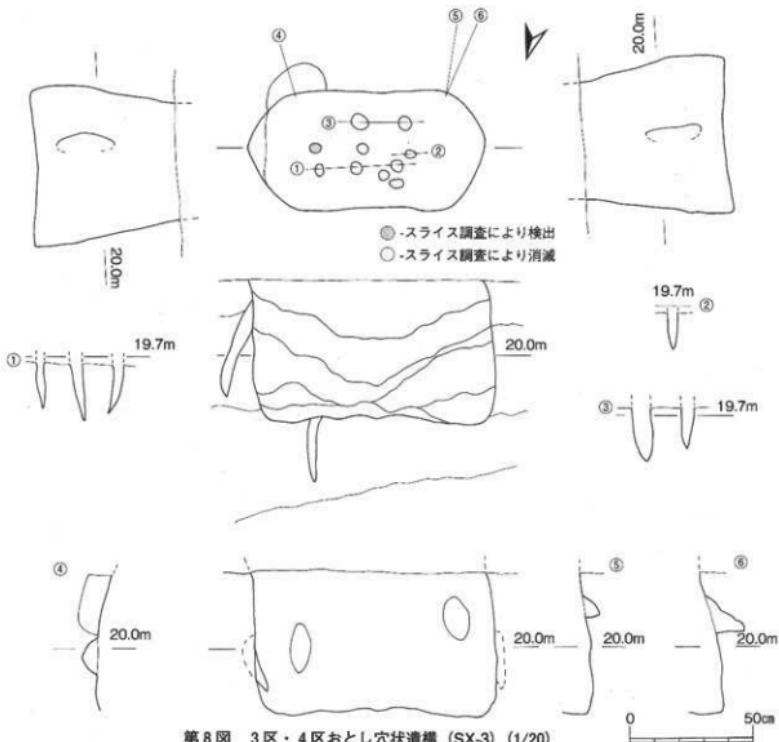


第6図 3区・4区おとし穴状遺構 (SX-1) (1/20)



**SX-2:** 上部がかなり削平されており底部のみの検出である。隅丸長方形で、SX-1より一回り大きい。多くの小ピットが検出されており、3種類に分類できる。1つは、断面①に見られるような先細りの杭痕跡と考えられるもの。2つ目は、断面②③に見られるような小ピット内に径2cmほどの細い杭を2本差し込んでいるもの。3つ目は、断面④に見られるような底面中央に穴を掘り礫を入れ込むもの。杭痕跡と考えられるものが最も多く、また中央の礫を含むものを切り込んでおり前後関係は明らかである。杭痕跡は斜めに検出されるものもあり、断面図で先端を総ぎ足しているものは検出時にはしっかりと見られたが、全体を検出したときにはスライスにより消滅してしまったものである。細い杭を差し込んでいるものは1基しか検出されなかつたが、検出の状況からは杭痕跡と考えられる小ピットと併用していた様子が伺える。礫を含むものはどのような杭を差し込んでいたのか明らかではないが、ピット内部の土層や礫が乱れており、埋設していた杭等が抜き取られた痕と考えられる。平面に見られる散在している礫もそれを物語っていると考えられる。また、底面やわずかに残る壁面に杭痕跡以外の遺構が検出されており、SX-1と同様である。SX-2では中央の大き目の穴に形状や大きさは不明であるが杭を差し込んでいたものを廃棄後、新たに逆説状の杭や細い杭を設置した状況が見られる。

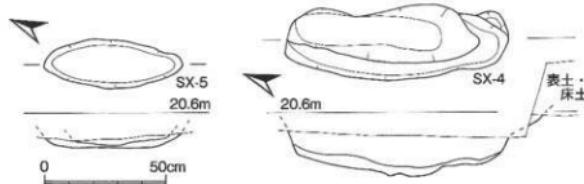
第7図 3区・4区おとし穴状遺構 (SX-2) (1/20)



第8図 3区・4区おとし穴状遺構 (SX-3) (1/20)

**SX-3:** 長軸方向に張り出す形態を呈し、短軸方向の断面はオーバーハンジしている。底面からは逆茂木状の杭痕跡と考えられる小ピットが7基確認されている。7基の小ピットは比較的規則的な配置を見せており、同時期に存在するものであろうか。SX-2に比べると垂直に近い状態で設置されている。壁面にも杭痕跡や遺構の跡が見られる。土層断面図の左下にむかって突き出た部分は杭痕跡と考えられ、壁面から斜めに突き出していたと考えられる。断面図④～⑥には杭痕跡とは違うピット状の遺構が検出されている。深さは20cm程度SX-1の壁面に残る遺構とも共通する。また、南側壁面の遺構見通し図に見られる断面部分には、浅い掘り込みが対のような形で検出されている。おとし穴状遺構掘削時の上方からの掘り具の痕跡とも考えられるが、壁面には同様な状況は見られず、何らかの遺構と考えられる。土層堆積はSX-1と同様の堆積状況で、明確に細分できるものではないが、自然に時間をかけて堆積したものと考えられる。断面⑤や⑥などに見られる痕跡はおとし穴状遺構内への出入りのためとも考えられそうである。

**SX-4・SX-5:** 不定形の楕円形を呈し、レンズ状の断面形状である。底面は比較的平坦に整えられている。いずれも遺構内の土層はこれまでのSX-1～SX-3と同様であり、時期的に大きな差はないと考えられる。SX-5は調査区壁面に壁面の立ち上がりの続きであろう痕跡が見られ、掘削当初の平面形状はかなり大きなものが予想される。底面に杭痕跡やその他の遺構と考えられる痕跡は見られず、



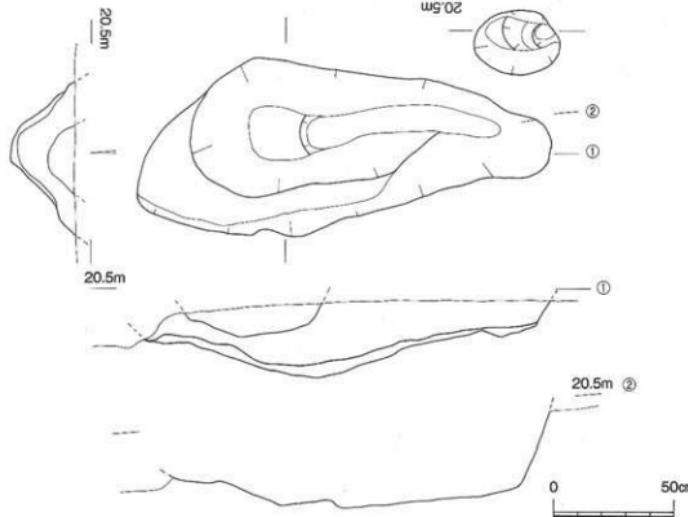
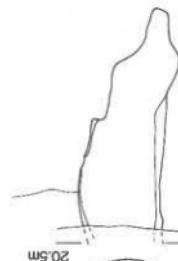
第9図 3区・4区おとし穴状遺構関連遺構 (SX-4・SX-5) (1/20)

おとし穴状遺構とは断定できないが、以前報告している雲仙市国見町十園遺跡でも底面に小ピットを持つおとし穴状遺構とともに検出状況・内部の土層堆積が同様な小ピットを持

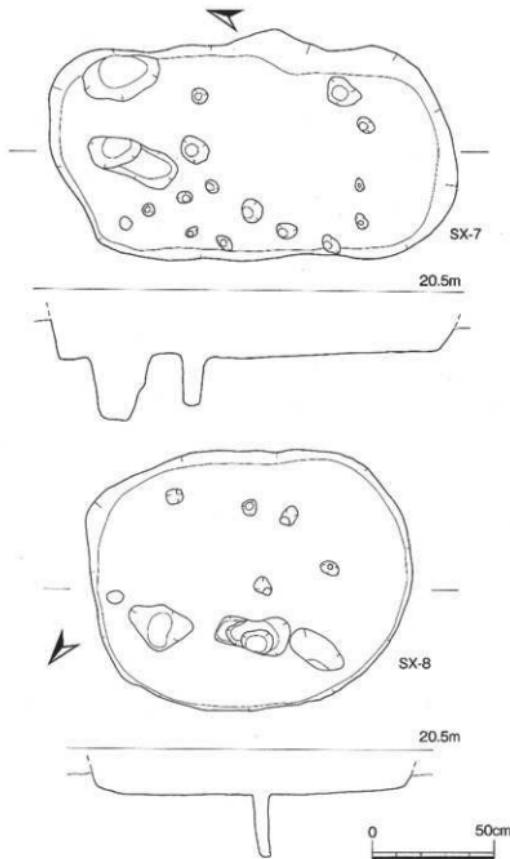
たない土坑が検出されている。おとし穴状遺構もしくはそれに關わる遺構と考えられるためここでは関連遺構として報告している。

SX-6: SX-4・SX-5と同様底面に小ピットをもたない。不定形の長楕円形で部分的にテラス状の平坦部をもつ。西側は後世の掘削により立ち上がり部分が確認できないが、東側は垂直とまでは行かないがかなりの角度で立ち上がっている。短軸断面はレンズ状を呈し、底部は平坦に整えられている。

土層の堆積状況はこれまでのものと同様で自然堆積によるものであろう。すぐ脇に柱穴状の遺構が検出されている。かなりの深さを持ち、内部の土層はSX-6と同質である。断面は遺構を断ち割って検出しているが、内部に段を持ち、数度の掘り直しが考えられる。SX-6と近接しており、当初の掘り込み面が重なる可能性もあるが、柱穴状遺構に近い部分のSX-6の立ち上がりはかなりの角度がある。



第10図 3区・4区おとし穴状遺構関連遺構 (SX-6) (1/20)



第11図 3区・4区おとし穴状遺構 (SX-7・SX-8) (1/20)

#### -小結-

以上、おとし穴状遺構と考えられる遺構の報告を行ったが、遺構内からの遺物はほとんど確認されなかった。SX-2から安山岩製の石鎚が検出されているが、それが時期判定の要素とはならない。遺構内の土層の火山灰分析 (SX-1) の成果からは、アカホヤ火山灰降灰以降の掘削という成果が得られている。龍王跡の調査では近隣の倉地川地区で押型文土器や塞ノ神式土器、縄文後晩期の土器が検出されており、アカホヤ以降の塞ノ神式土器の時代もしくは、縄文時代後晩期のおとし穴状遺構と考えられるであろうか。

今回、一部の遺構でしかスライス調査を実施できなかったが、底面ピットの検出や壁面に残る遺構等についても有効的であった。ただし時間的・金銭的に多大な労力を要することは確かであり、今後の調査においては、事業者側との綿密な協議が必要と考えられる。

SX-7・SX-8: いずれもおとし穴状遺構と考えられるが、時間の都合で土層の確認や底面のスライス調査は行っていない。したがって実測図に見える小ピット等の遺構については上面からの確認のみで深さや本当に小ピットが存在するかどうかについては確証がない。SX-7は、平面形は隅丸長方形を呈し、立ち上がりが15cm程残る。小ピットのほかに柱穴状の掘り込みも見られる。小ピットはいずれも10cm~15cm程の掘り込みである。柱穴状の遺構は断面図でも判るが、深さ25cm程の掘り込みとなっている。土層堆積はこれまでのおとし穴状遺構と同様である。SX-8は円形に近く、立ち上がりは5cmほどしか残っていない。小ピットのほかに柱穴状の掘り込みが確認されている。小ピットはSX-7と同様10cm~15cm程の深さであるが、断面図にあるものは深さ25cm程まで確認している。図面下側に並ぶ3つの柱穴状の遺構は深さ30cm程のしっかりとしたものである。土層堆積は底面しか残っていないことからはっきりしないが、検出したときの印象はこれまでのものと同じである。いずれも時間の都合できちんとした調査が出来なかったことが悔やまれる。

(辻田)

第1表 3区・4区おとし穴状遺構計測表

図番号	遺構番号	区	遺構内遺物	サイズ(m) 長×短×深	上面プラン	上方からの 底面ピット 総数	スライス調査 による 新規ピット数	スライス調査 による 消滅したピット数	本末の ピット数	備考
6	SX-1	3・4	石鏸	0.86 × 0.64 × 0.81	隅丸長方形	2	2	1	3	壁面に逆茂木ではないが、遺構の検出が見られる。
7	SX-2	3・4	なし	1.19 × 0.79 × 0.15	隅丸長方形	23	5	5	23	逆茂木痕以外の ピット状痕跡は計上していない。また断面②③に見られる差し込まれた細い杭痕跡も計上している。
8	SX-3	3・4	なし	0.97 × 0.48 × 0.56	隅丸長方形	9	1	3	7	壁面から逆茂木痕やその他遺構が検出されている。
9	SX-4	3・4	なし	0.97 × 0.30 × 0.17	不定形の 長指円形	0			0?	スライス調査なし
	SX-5	3・4	なし	0.57 × 0.20 × 0.05	不定形の 長指円形	0			0?	スライス調査なし
10	SX-6	3・4	なし	1.65 × 0.71 × 0.30	不定形の 長指円形	0			0?	スライス調査なし
11	SX-7	3・4	なし	1.66 × 0.71 × 0.15	隅丸長方形	17			17?	スライス調査なし
	SX-8	3・4	なし	1.31 × 1.06 × 0.10	円形	9			9?	スライス調査なし
4	SX-9	3・4	なし	1.15 × 0.20 × ?	細い長指円形	0			0?	スライス調査なし



第12図 倉地川地区検出の主な遺構 (1/400)

## 第2節 繩文時代 早期遺物

### (1) 出土状況

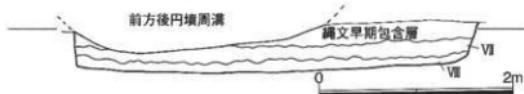
(第12図、図版2)

縩文時代の遺物は遺跡全体から散見されるが、特に龍王遺跡倉地川地区では早期の遺物包含層が検出されている。当地区は方形周溝墓や前方後円墳、AT下位の石器群などが検出されている(竹中2006、辻田2007)。不時発見の調査区であり、調査期間の都合で縩文時代や旧石器時代の調査には潤沢な調査時間は費やせなかつた。遺物はドットによる

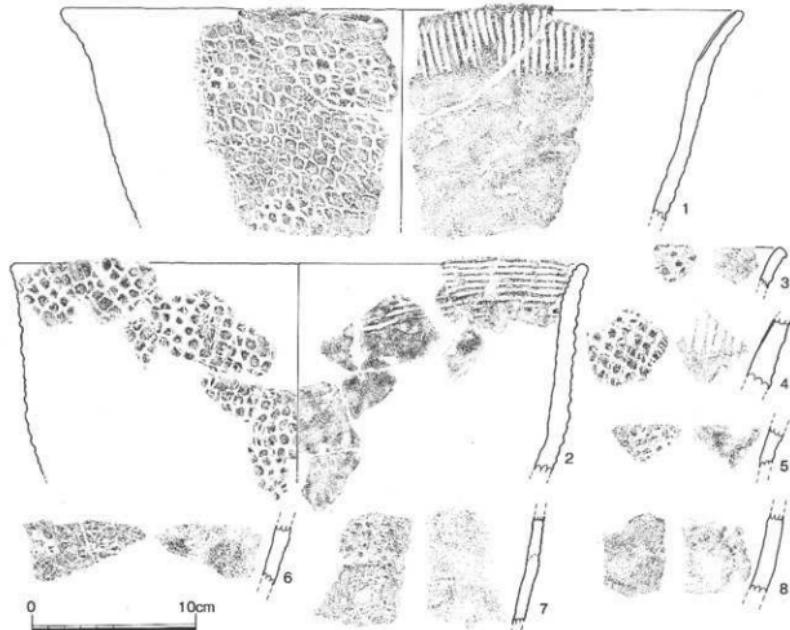
取り上げを行っているが、古墳造営時に包含層が削平されている部分も多く遺物の分布による特徴等は見出せなかつた。ただし土層については非常にプライマリーな堆積を見せており、早期包含層からは主に押型文土器の一群が検出されており、その上に薄く残る土色の若干違う包含層には押型文土器以降と考えられる土器が検出されている。また、風倒木痕と考えられる2ヶ所の落ち込みからも押型文土器が検出されており、それぞれに器形や文様にまとまりがあり、一括性の高いものと考えられる。倉地川地区で検出された主な遺構を第12図に示しているが、早期包含層が残存する部分は遺構の検出部分と重なつてゐる。縩文以前の調査を行うに当たつては非常に残念な状況であるが、本来良好な土層堆積であり、また、遺物も一括性の高いものと考えられ、遺物の実測図のみであるが報告を行う。

### (2) 土層堆積状況 (第13図、図版2)

倉地川地区は畠地として利用されていたため比較的良好な土層堆積を示す。しかしながら、前述のとおり方形周溝墓や前方後円墳が検出されており、その造営時に土層が掘削されている部分も多い。土層図を見ても判るとおり、前方後円墳の周溝により早期包含層がほとんど削平されている部分も少なくない。調査における遺構検出面は早期包含層上面で、土層図には表現していないが、早期遺物包含層の上面に薄く早期以降の遺物が含まれた土層があり、方形周溝墓や前方後円墳検出時には土器片や黒曜石片が検出されている。早期包含層は黄褐色でしまりはあるが粘性は弱く比較的サラサラしている。火山灰分析の結果(辻田2007)では、早期包含層下位ではAT火山灰は検出されているが、それより新しいアカホヤ火山灰などは検出されておらず、早期押型文土器時期の土層堆積と考えて間題ないであろう。第V層は黒色黒曜石製ナイフ形石器群を包蔵する黒色土層で、AT下位に見られる暗色帶と考えられる。第V層は黄色のしまりの良い土層で、百花台遺跡群に見られる第8層と同様の基盤層である。



第13図 倉地川地区基本土層図 (1/50)



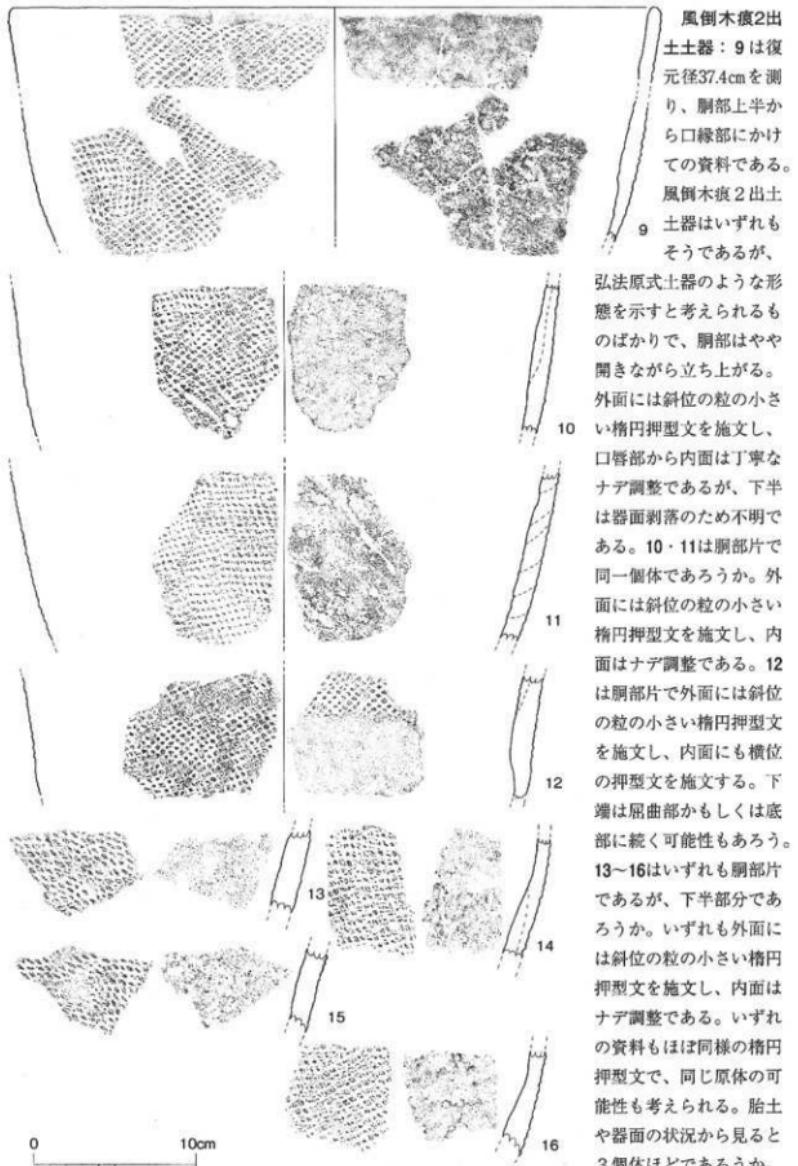
第14図 倉地川地区風倒木痕1出土縄文土器 (1/3)  
(SX-1)

(3) 風倒木痕 (第12図、図版2)

前頁の第12図に示すとおり、2箇所の落ち込みが確認されている。詳しい平面図や土層図は提示しないが、平面形はいびつな円形で、深さは50cm～70cm程の底面の歪んだレンズ状の落ち込みで、内部の土層が横転及び反転するような状況である。検出状況や土層の堆積状況などから風倒木痕と判断した。押型文土器が数点検出されているが底面ではなく内部に充填された土層中の資料である。大ぶりな破片で、SX-1では粗大な楕円押型文土器、SX-2では粒の細かい楕円押型文土器が検出されており、時期差があると考えられる。

(4) 出土遺物 (第14図、図版7～図版9・図版28)

風倒木痕1出土土器：1は復元径41.6cmを測り、胴部上半から口縁部にかけての資料である。底部形態は不明であるが、尖底とは言いがたく、小さめの平底から胴部が開き、口縁部がさらに外反する器形を呈すと考えられる。外面には斜位の粗大な楕円押型文が施文され、施文後押しつぶしてある。口縁部の外反する部分の内側には縦位の原体条痕が施される。胴部内面は横位及び斜位のナデ調整が施され指頭圧痕が残る。2は1と同様な器形であるが、胴部にやや屈曲する部分をもち、胴部上半はほぼ直立する。復元径は35.6cmを測る。口縁部の外反は1に比べると弱く、外面は斜位の粗大な楕円押型文が施され、施文後押しつぶしてある。口縁部の外反する部分の内側には横位の原体条痕が施され、胴部内面は横位のケズリの後丁寧なナデ調整が施されている。3も口縁部でやや外反する。外面にはやや粗大な押型文が施文されている。4は口唇部を大きく内面に縦位の原体条痕が施され、外面には粗大な押型文が施文される。1と同一個体であろうか。5～8は外面に粗大な押型文を施文する胴部片で、3・5・6・7は胎土や器壁の厚さが同様で同一個体と考えられる。8も同様に1と同一個体か。

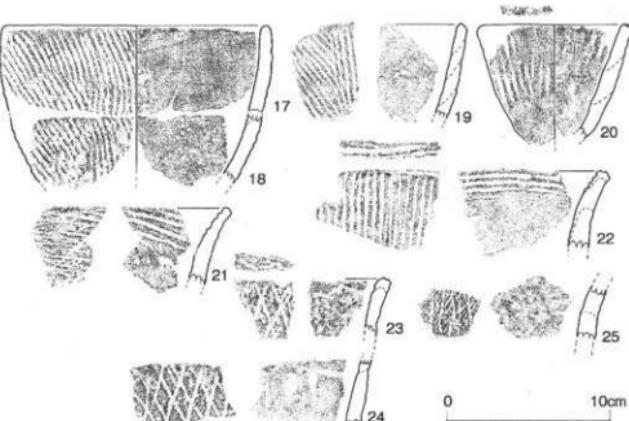


第15図 倉地川地区風倒木痕2出土縄文土器 (1/3)  
(SX-2)

風倒木痕2出土  
土器：9は復元径37.4cmを測り、胴部上半から口縁部にかけての資料である。風倒木痕2出土  
9 土器はいずれもそうであるが、

弘法原式土器のような形態を示すと考えられるものばかりで、胴部はやや開きながら立ち上がる。外面には斜位の粒の小さい楕円押型文を施し、口唇部から内面は丁寧なナデ調整であるが、下半は器面剥落のため不明である。10・11は胴部片で同一個体であろうか。外面には斜位の粒の小さい楕円押型文を施し、内面はナデ調整である。12は胴部片で外面には斜位の粒の小さい楕円押型文を施し、内面にも横位の押型文を施す。下端は屈曲部もしくは底部に統く可能性もある。13～16はいずれも胴部片であるが、下半部分であろうか。いずれも外面には斜位の粒の小さい楕円押型文を施し、内面はナデ調整である。いずれの資料もほぼ同様の楕円押型文で、同じ原体の可能性も考えられる。胎土や器面の状況から見ると3個体ほどであろうか。

包含層及び層位  
外資料：これより  
以下は龍王遺跡倉  
地川地区縄文早期  
遺物包含層出土資  
料及び古墳周溝等  
から出土した土器  
を紹介する。層位  
外の資料も多分に  
含まれているが、  
基本的には早期包  
含層に埋蔵されて  
いたものと考えら  
れる。

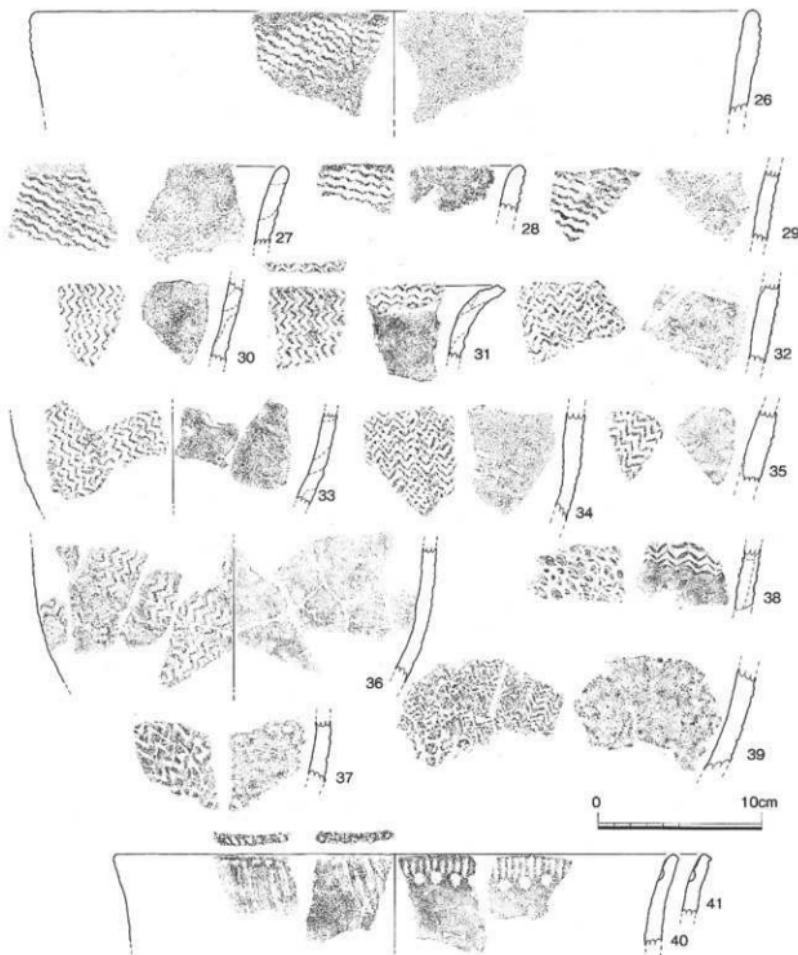


第16図 倉地川地区出土縄文土器（燃糸文）(1/3)

燃糸文土器：17・18は接合しないものの同一個体と考えられる。復元径16cmを測り、外面には斜位の燃糸文を施文し、口縁部はナデ調整、内面はヘラ状工具による丁寧なナデ調整が見られる。胴部は緩やかに内湾し、口縁部は直立する。底部形態は不明であるが、傾き具合から、尖底もしくは尖底に近い丸底の可能性が高い。19はほぼ同じ形態の資料で、口縁部片である。外面には斜位の燃糸文を施文し、口唇部はナデ調整、内面はヘラ状工具による丁寧なナデ調整が見られる。17・18と同一個体か。20は外面に縦位の燃糸文を施文しているようであるが、器面が荒れておりはっきりとは確認できない。条痕文土器の可能性もある。また、口唇部には若干であるがくぼみが観察され、刻目と考えられる。内面には原体条痕と思われる痕跡も見られる。復元径は9.5cmを測り、底部は不明ながら尖底気味の丸底か。胴部はほほまっすぐ開くような器形であるが、前述の17・18・19と同様の器形と考えて問題ないと思われる。また、胎土や色調などの特徴もよく一致している。上記の土器は福岡県松木田遺跡（米倉2001）の資料に類似点が見出せよう。右下がりの燃糸文や口唇部に刻みのある資料など非常によく似ている。また、松木田遺跡では大・中・小と口縁径の大きさで機能分化がなされている事が判明しており、それに当てはめると、17・18は中、20は小となろうか。21は外面に横位の燃糸文を施文し、口縁部内面にも横位の燃糸文が施文される。内面はナデ調整が見られ、指頭圧痕も観察できる。口縁形態は外反し、前述の土器群と異なる器形となろう。22は外面に縦位の燃糸文を施文し、口縁部内面には横位の原体条痕もしくは燃糸文が見られる。口唇部にも沈線状の施文が見られ、同様に燃糸文であろうか。内外面ともにナデ調整であるが、外面拓影左上に見られる丸い白抜き部分は、指頭により文様が押しつぶしてある。口縁形態が外反し21と同様である。23・24は接合しないものの同一個体と考えられる。外面に網の目状の燃糸文を縦位に施文し、口縁部内面には横位の網の目状の燃糸文を施文する。口唇部にも同様の燃糸文を施文している。内面にはヘラ状工具による横位のケズリ痕（24内面拓影左側の上半分）が見られる。器形は斜めにまっすぐ開き、口縁付近でわずかに外反する。25は外面に網の目状の燃糸文を縦位に施文し、内面はナデ調整である。やや外反する形状を示し、口縁部付近の破片であろうか。23・24に比べると網の目状の燃糸文がくずれている。

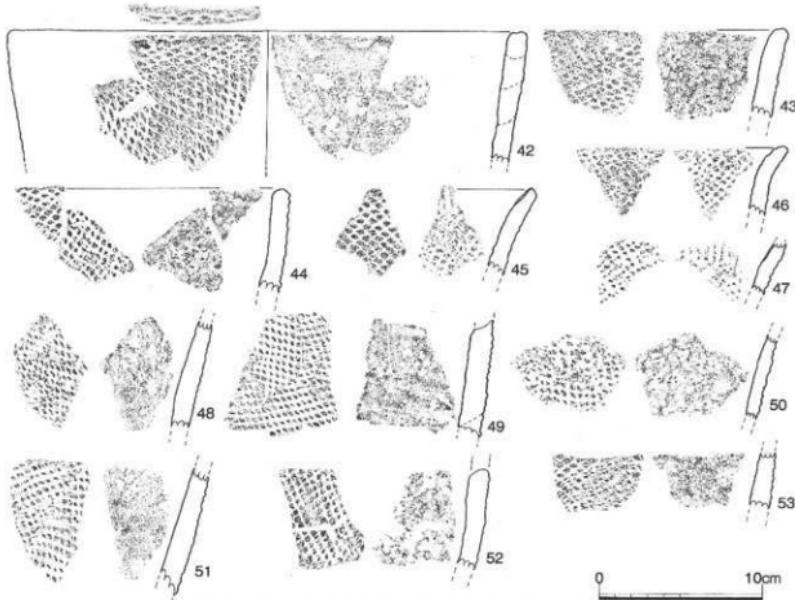
#### 【参考文献】

米倉秀紀2001『松木田遺跡群2』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第686集 福岡県福岡市教育委員会



第17図 倉地川地区出土縄文土器（山形）(1/3)

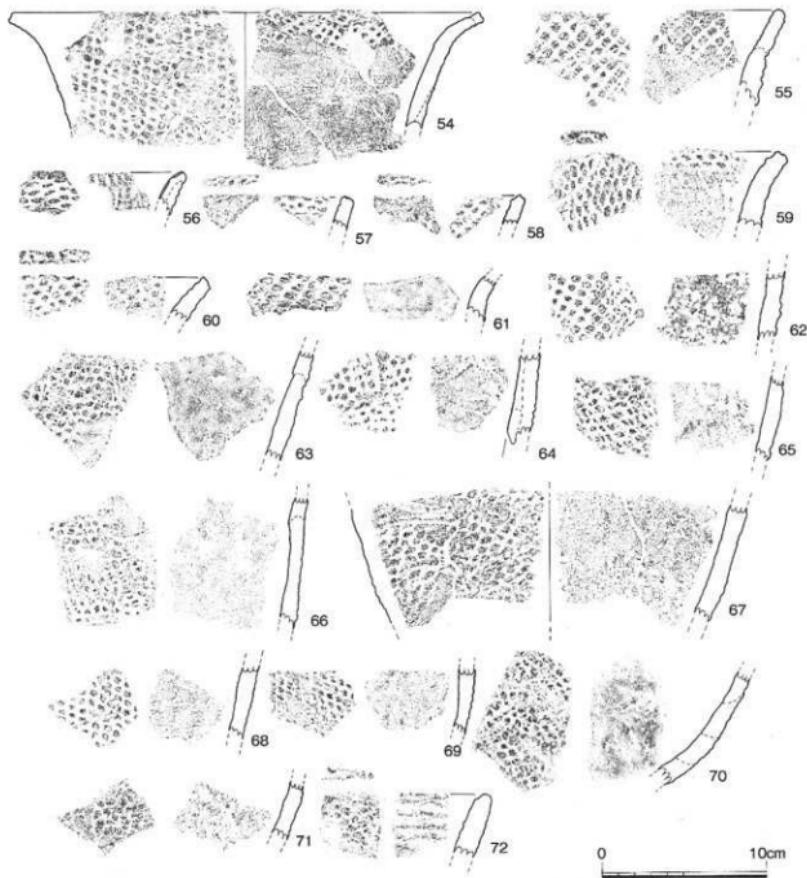
押型文土器（山形）：26～29は胎土や焼成の具合から同一個体の可能性が高い。外面にゆるい山形押型文を斜位に施文し、口唇部から内面にかけては丁寧なナデ調整である。器形はゆるく開く形態でいわゆる「弘法原式」と考えられる。30・31・33も同一個体と考えられる資料で、外面に縦位の山形押型文を施文し、口縁部内面にも横位の山形押型文が施文される。また、口唇部も同様に山形押型文が施文される。内面は非常に丁寧にナデられている。器形は大きく口縁が外反し、33から判るように胴部下半の復元径は19cm程で比較的小型である。32・34～37は胴部片で外面に山形押型文を施文する



第18図 倉地川地区出土縄文土器（粒の小さい楕円）(1/3)

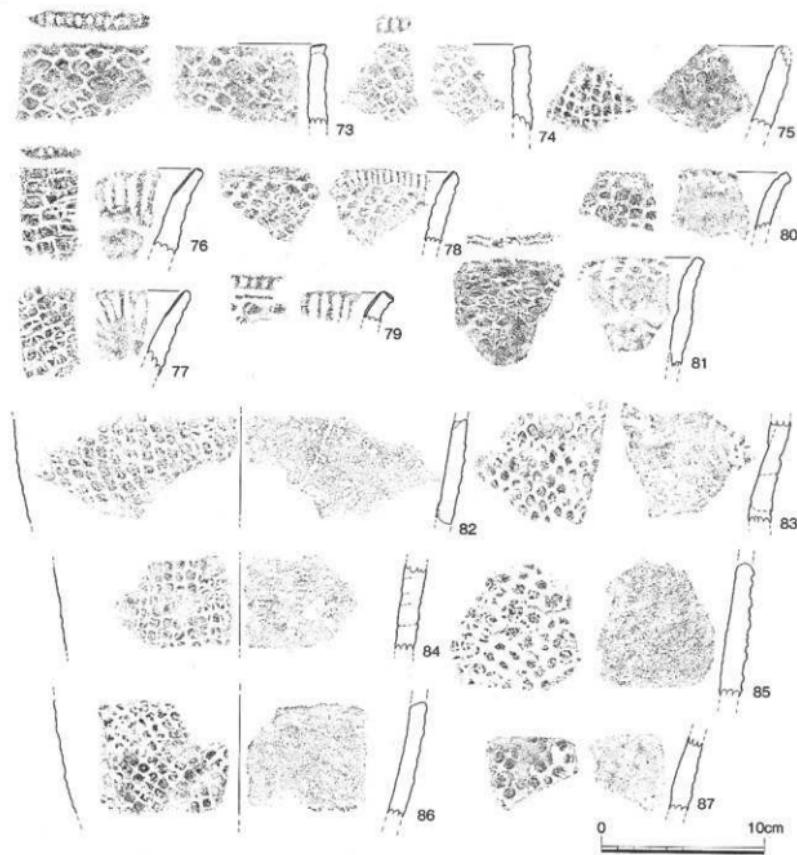
が、32・34は横位、35～37は斜位となる。内面はいずれもナデ調整である。38は外面にやや粗大な楕円押型文を施すが、内面には横位の山形押型文が見られる。また、内面は丁寧な横位のナデ調整である。器形は若干外反するようであり、口縁部付近であろうか。39は胴部下半の資料と考えられるが、外面上半分に横位の山形押型文、下半分に粗大な楕円押型文を施す。内外面とも器壁の剥落が著しく、調整は不明である。40・41は同一個体と考えられ、復元径は35cmを測る。外面は非常にゆるい継位の山形押型文を施し、40の拓影に見られる無紋部分は施文後にナデ消しているようである。口縁部内面には継位の原体条痕とその下に刺突列点文が見られる。また、口唇部には細かい刻みが施されている。器形は若干外反する。

押型文土器（粒の小さい楕円）：42は復元径33cmを測る。外面に斜位の楕円押型文を施し、内面にはヘラ状工具によるケズリの後、ナデ調整が施されている。口唇部にも楕円押型文の施文が見られる。口縁形態はほほまっすぐ立上がり。43・44も42と同様な口縁部片で、外面に横位・斜位の楕円押型文を施す。口縁部から内面にかけてはナデ調整である。45・46は外反する口縁部片で、いずれも内外面に楕円押型文を施す。45は口縁部内面に継位の原体条痕が施される。47・50は胎土や焼成の具合から同一個体の可能性が高い。47は口縁部片で口唇部を欠損するが内外面に楕円押型文を施し、内面はナデ調整である。47・50ともに器壁が薄く、やや小型の資料であろうか。図示していないが、50の中央付近で復元径20cmほどを測る。48・49・51～53はいずれも胴部片で比較的まっすぐ立あがる形態を示す。42～44と同様な器形を呈すものと考えられ、弘法原式の器形に類似する。いずれも外面に楕円押型文を施し、内面は器面の荒れで不明なものもあるが、ナデ調整と考えられる。49や52には接合痕も残されている。



第19図 倉地川地区出土純文土器（やや粗大な楕円）（1/3）

押型文土器（やや粗大な楕円）：54～60は口縁部で、いずれも大きく外反する資料である。外面には楕円押型文を施し、56以外は口縁部内面にも同様に施文する。56は口唇部内面に刻み目を施し、その下に原体条痕が施される。57～60は口唇部にも楕円押型文が施文される。内面は、54は横位・斜位のケズリの後、ナデ調整。55・59はナデ調整である。また、54は復元径28.8cmを測り、口縁部外面に赤色の色彩痕がみられる。61は口縁部直下であろうか大きく外反する形態を呈す。外面は楕円押型文、内面は丁寧な横位のナデ調整である。62～71は脛部片で、67は中央部分で復元径22cmなどを測る。外面はいずれも楕円押型文を施し、内面は63・64・66・67・70がナデ調整、68が工具によるケズリである。また、70には指頭圧痕も見られる。72は口縁部片で、外面に楕円押型文が施文される。小破片で器形は不明であるが、弘法原式のような器形か。

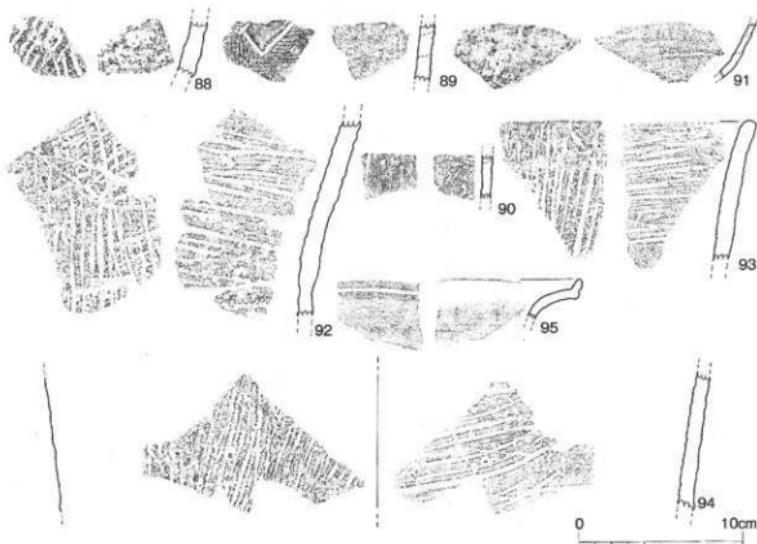


第20図 倉地川地区出土縄文土器（粗大な楕円）（1/3）

押型土器（粗大な楕円）：73・74は胎土や焼成の具合から同一個体の可能性が高い。内外面ともに楕円押型文を施し、施文後押しつぶしてある。口唇部には刻み目が施される。腹部から口縁部までまっすぐに立ち上がると思われる器形で、復元径は37cm前後となる。75も口縁部片で内外面ともに楕円押型文を施す。口唇部は欠損するが、口縁部形態はやや開き気味であるがまっすぐに立ち上がる。76・77は胎土や焼成の具合から同一個体の可能性が高い。外面は楕円押型文を施文後押しつぶしてある。口縁部内面には縦位の原体条痕が施され、76は口唇部に刻み目が見られる。器形は大きく開く形状を呈す。78～81も口縁部片で外面には楕円押型文を施す。79は小破片であるが、口縁部内面に縦位の原体条痕、口唇部に刻み目が見られる。78は口縁部内面に縦位の短い原体条痕が施され、その下に楕円押型文が施文される。口唇部は面取り後、ナデ調整か。80・81は内面にも楕円押型文が施文されるが、81は口唇部にも施文が見られる。いずれも口縁部が外反する形状を示す。82・87は胴部片で、いずれも開く器形の胴部片と考えられる。82・84・86は中央部付近での復元径が27cm・22cm・22cmほどである。内面は82・83がケズリの後ナデ調整、それ以外はナデ調整である。

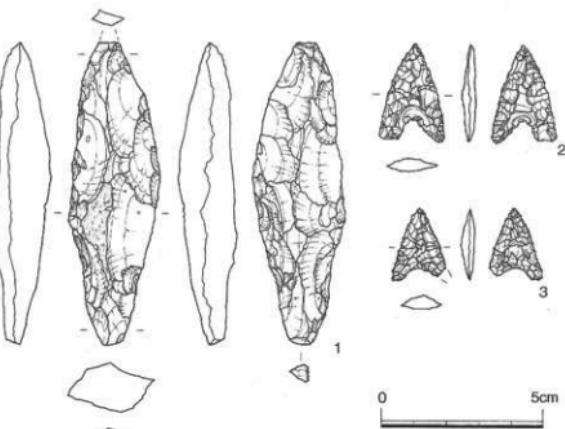
その他の縄文土器：88は厚手の条痕文土器で胴部片である。外面に粗い条痕文が施文される。内面は器壁が荒れており調整等は確認できない。晩期の条痕文のそれとは胎土や焼成が大きく異なり、早期の条痕文土器と考えられる。89は外面に沈線で区画された内部に斜位の撚糸文を充填させた土器で、塞ノ神式系統の土器の胴部片である。ほほまっすぐに立ち上がり、内面は丁寧な横ナデ調整である。90は89と同様の塞ノ神式系統の土器の胴部片と考えられる。外面に沈線で区画された内部に縦位の撚糸文を充填させており、89に比べると器壁も薄いが、撚糸文の単位も非常に小さいものである。器形はほほまっすぐに立ち上がり、内面は丁寧なナデ調整である。89・90はいずれも早期後半の押型文土器以降の土器群である。91は胎土に大量の滑石及び結晶片岩を含む土器片で、厚さは5mmほどと薄い。胴部下半の底部に近い部分と考えられ、外面はナデ調整、内面はケズリの後ナデ調整である。文様は確認されない。春日式及び並木式の時期のものか。92～94は胎土や焼成の具合から同一個体の可能性が高い。外面に縦位の条痕文を施し、内面には横位の条痕文が施文される。口唇部はナデ調整により丸く整えられている。晩期の粗製土器で深鉢であろう。94の中央部で復元径40cmを測り、口縁径ではかなりの大きさとなろう。95は晩期の精製土器の浅鉢口縁部である。内外面にヘラ状工具による丁寧な磨きが見られる。大きく広がる口縁部の端が小さく立ち上がり、外面に沈線が一周する。92～95は晩期黒川式土器の時期のものである。

(辻田)



第21図 倉地川地区出土縄文土器（その他）(1/3)

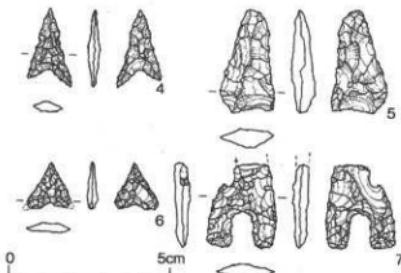
**早期包含層出土石器：**  
これまで紹介してきた土器とともに検出された石器について述べる。調査時の出土状況は前述のとおり、詳細な調査を行うことができたわけではなく、非常に粗い調査のため多くの取りこぼしがあると考えられる。特に石鏃などの小型の剥片石器や剥片・碎片については廃土のなかに紛れ込んでいるものも多かったと考えられる。ここで紹介する



第22図 倉地川地区出土縄文時代石器（石槍・石鏃）(2/3)

る石器はトゥールばかりで、剥片類は掲載していない。粗い調査とはいえ土器に比べると石器の出土は非常に少なく、しかも明確に早期包含層出土の資料も少ない。第22図1は早期包含層から最初に出土した石器で、石槍である。雲仙市では早期の石槍は百花台遺跡・弘法原遺跡について3例目である。いずれの遺跡でも1点ずつの出土であり、すでに実用品としての役目は終了していたのであろうか。同じく第22図2・3の石器も早期包含層出土のものであるが、その他の石器は出土層位が明確ではなく、多分に他時期の遺物の可能性も考えられる。出土した土器片についてはそのほとんどが早期押型文土器の時期に限定されているが、わずかながら早期押型文土器期以外の土器片も含まれており、ここで紹介する石器すべてが前述の土器群と伴うものではない。以下、詳細を説明する。

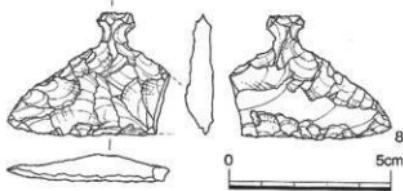
**石槍・石鏃：**1は安山岩製の石槍で、長さ9.3cm、幅2.85cm、厚さ1.5cmを測る。下端に先行する剥離面が観察されるが打面の可能性もある。すると厚手の縱長状の剥片が素材と考えられるが、主要剥離面側に素材剥片剥離時の剥離面は見られない。背面・主要剥離面いずれも辺縁からの剥離で整形されているが、背面側は下半に疊面を残しており、主要剥離面側に比べると粗い調整である。側面観からも判るように主要剥離面側は薄く仕上がっており、背面側は大きく盛り上がるような形状を示し、未製品の可能性も考えられよう。先端部は当時の折れである。2は佐世保市針尾島産出と考えられる青灰色黒曜石製の石鏃である。薄い剥片を素材として表裏面に丁寧な平坦剥離を施して整形している。素材剥片の主要剥離面が裏面に残されており、基部側に素材剥片剥離時の打点がある。右側縁裏面側の上半部に見られる2箇所の白抜きは、発掘時の剥離である。全体的な形状は二等辺三角形形状を呈し、基部側には深く大きな抉入が見られ、いわゆる鉤形鏃と考えられるが、左側の脚は鉤形鏃状であるのに対し右側は脚先端が先鋒となる。3は2と同じ佐世保市針尾島産出と考えられる青灰色黒曜石製の石鏃である。2より一回りほど小型である。やや厚手の剥片を素材としており、表裏面に丁寧な平坦剥離を施して整形している。素材剥片の主要剥離面が裏面に残されており、右側に素材剥片剥離時の打点がある。全体的な形状は二等辺三角形形状を呈し、基部側には大きくやや浅い抉入が見られる。また、右側の脚の先端部分は発掘時に欠損しており、その形状は不明である。側面観でも判るとおり、主要剥離面側は剥離面にそって平坦剥離が施されているが、背中の中央部分は肉厚な形状を示し、素材剥片の形状に影響されていると考えられる。



第23図 倉地川地区出土縄文時代石器（石鏃）(2/3)

れるが、先端部や脚部の作り出しが不完全で未製品とも考えられる。裏面に素材剥片の主要剥離面と考えられる剥離面が見られ、それほど大きな剥片が素材とは考えにくく、当初の作成段階より小型のものと考えられる。表裏面ともに非常に細かい剥離で調整がなされている。脚部の先端は両方とも欠損しており、本来は正面形が正三角形を呈し、基部に若干抉りを持つ形態と考えられる。7は石鏃を転用した彫器と考えられる。佐世保市針尾島産出と考えられる青灰色黒曜石を素材とした長身の鉤形鏃と考えられ、基部の抉りが非常に深い。若干右脚の幅が狭いが、第22図2のような形状ではない。表裏面全面に周縁から細かい剥離が施され、丁寧に作り上げられている。先端部の欠損後、裏面右側に見られる大きな剥離を施した後、上端の折れ面からの左側縁への極状剥離が観察できる。裏面右側の大きな剥離を行った際には正面形状に見られるように左側縁が「しの字」状に抉れたような形状になったものと考えられ、極状剥離は「しの字」状の剥離の途中までである。4点の石鏃の中では、7が石材・形状ともに第22図の2・3に類似しており、前述の早期土器群に伴うものであろうか。

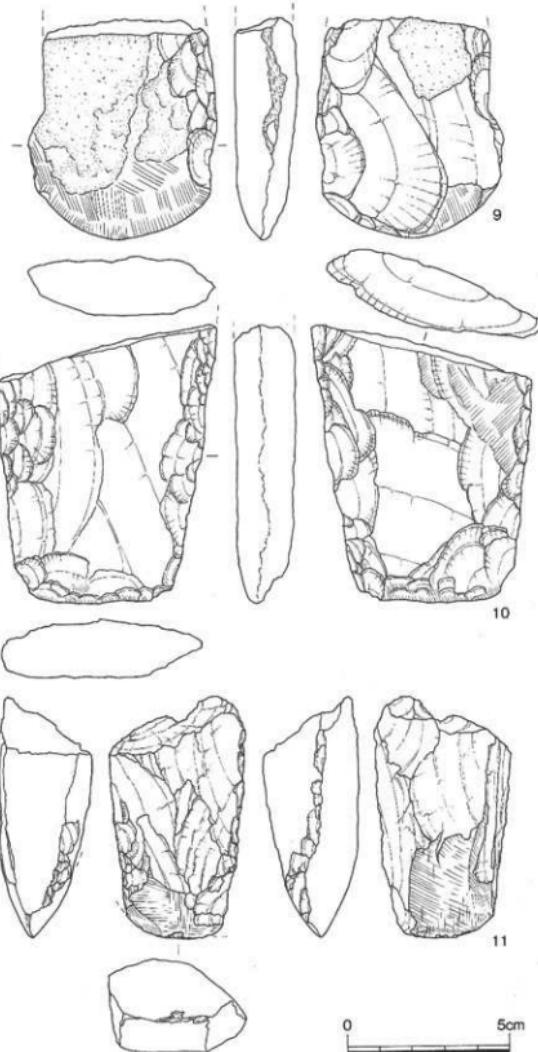
石匙：8は佐世保市針尾島産出と考えられる青灰色黒曜石を素材とするが、前述した第22図2・3や第23図7とは違い、光沢が無く表面がややざらつく感じのものである。表裏面は風化により白っぽく変色している。薄い幅広の剥片を素材として、表裏面の辺縁から細かい調整が施されている。表面は全面に粗い調整で仕上げられているが、裏面は辺縁部から細かい平坦剥離を施しており、素材剥片の主要剥離面が大きく残る。石器右端を発掘時に欠損しているが、正面形状は横長の二等辯三角形と考えられ、特に下縁は直線状になるように丁寧に仕上げられている。二等辯三角形の頂点部分には摘みが位置するが、抉り部分がしっかりと調整され全体に均整の取れた形状となっている。第22図2・3や第23図7と同様の石材であり、形状的にも今回出土している早期土器片と伴うものであると考えられる。そうであるとすると、石鏃と石匙では同じ産地の石材を使用しながらも、石材の石質の違いによって用いる素材として石器を区分している様子も伺える。資料数が少ないため断定的なことは言えないが、より質の良い黒曜石は狩猟具として高い殺傷能力の必要な石鏃へ使用し、ややざらつき感のある安山岩質の石材は、裁断具としての石匙へ使用したものであろうか。と考えると第22図1の安山岩製の石槍は、実用品としての使命よりも、よりシンボリックな物としてのイメージを持つこともできよう。



第24図 倉地川地区出土縄文時代石器（石匙）(2/3)

石斧：9は上半部分を欠損するが安山岩製の打製石斧である。刃部の形状は大きく湾曲し側面形状から判るとおりそれほど先鋒ではない。表裏面及び側縁にも素材の礫面が残っており、扁平な素材を利用したものと考えられる。地元雲仙産出の角閃石安山岩と考えられる。10は同じく地元産の角閃石安山岩製の打製石斧である。上半部分を欠損するが、刃部形状は直線状になるよう仕上げられている。表裏面には側縁から細かく丁寧な剥離が見られ、側面についても直線的に仕上げられており、本来の形状は角張った短冊状と考えられる。刃部には使用によるものか若干研磨痕が見られ、裏面にも比較的広い範囲で使用によるものか研磨痕が見られる。側面形では判りづらいが、刃部は比較的先鋒に作り込まれている。11は蛇紋岩製打製石斧の刃部である。小破片であり全体形状は不明だが、その厚みや刃部の形状から比較的大型の伐採具と考えられる。刃部はきれいに研磨されているが、先端部分に使用痕であろうか表裏面ともに小剥離が見られる。欠損部分が多いため判りづらいが、本来は実測図の側面観よりもさらに厚みを持っていたことは明らかである。また、両側縁に見られるように、破碎後に行われたと考えられる調整が見られるため、伐採具としての役目を果たした後、再利用されていることが予想される。

以上3点の石斧については、所属時期を推し量ることは難しい。  
(辻田)



第25図 倉地川地区出土縄文時代石器（石斧）(2/3)

### 第3節 弥生時代終末～古墳時代初頭住居跡群

#### (1) 全体の検出状況（第26図、巻頭図版③、図版4～5）

弥生時代終末～古墳時代初頭の住居群は龍王遺跡12区～15区付近を中心に検出されている。12区～15区については圃場整備事業において排水路となる部分であり、当初より全面発掘調査を予定していた地区であった。12区～14区にかけての若干標高が低い部分に、切り合いながら住居跡群が検出されている。ほとんど立ち上がりを持たない住居跡もあるが、深さ30cmを超えるものも検出されている。大きさや形状は様々で、時期による変異が伺える。それ以外の拡張区及び22区や30区などは当初盛土保存の地域であったが、表土の厚さが予想以上に薄く、工事による表土除去中に遺構が露出してしまったため、事業者側と急遽協議し、遺構の確認及び一部の遺構については完掘し調査を行うこととした。拡張区については重機によりほぼ全面に遺構が露出していたため、小型の重機により遺構検出面を丁寧に検出し、その後人力により詳細な検出を行っている。22区付近は完全に遺構の露出している部分を中心にトレンチ状の調査区を設定し遺構の確認を行った。その結果、方形の住居跡数棟の他に、古墳時代初頭の溝状遺構が巡ることが予想されたため、再度事業者側と協議し、全体の検出とはいかなないまでも、全体の様相がつかめる程度にトレンチ調査を実施することとした。その結果1辺約35mの若干歪んだ「方形の環溝」が検出された。ほぼ同じ地点で2条検出されており、その切り合い関係から前後関係は明らかである。当初より全面発掘調査を予定していた12区～15区については、検出された遺構の記録は、基本的に手実測を行った。それ以外の拡張区や22区・30区等は光波測量機により実測を行い、発掘部分等については必要に応じて手実測を行った。

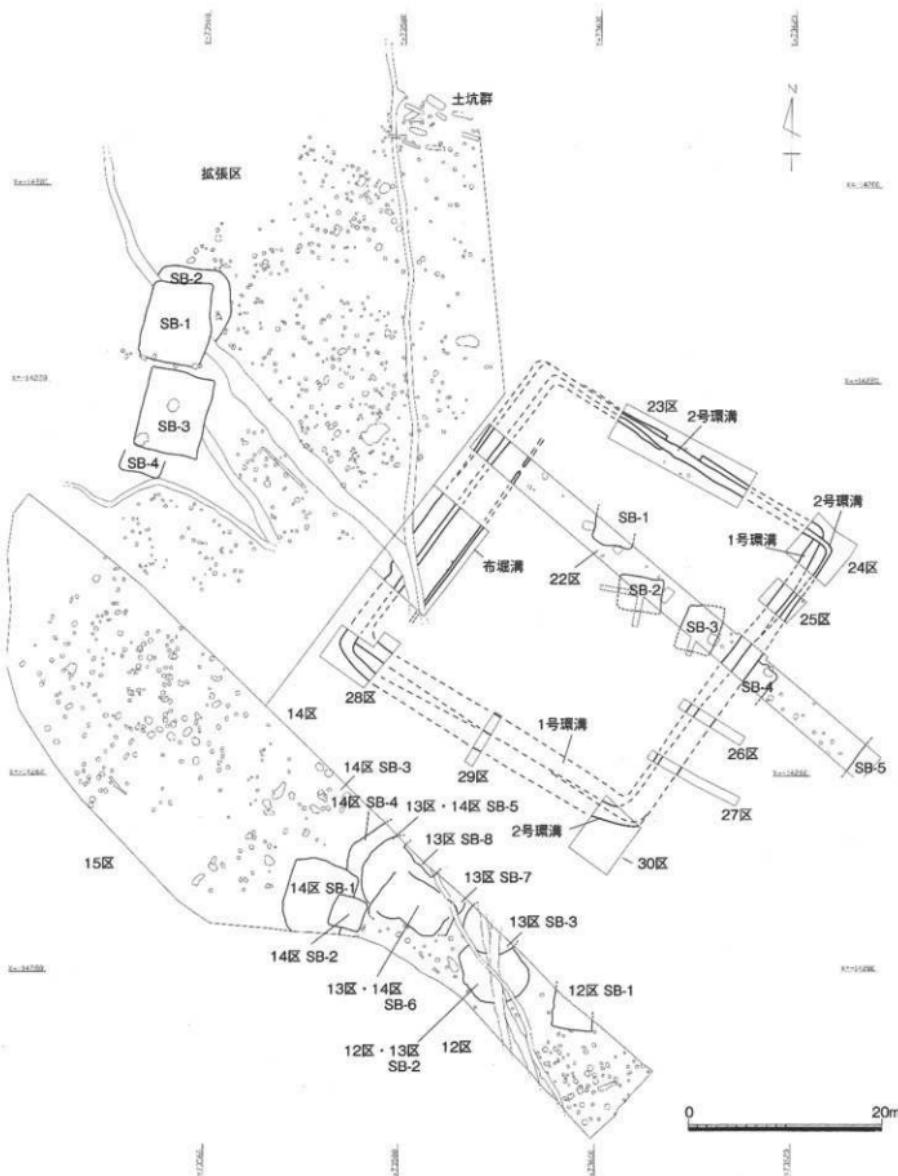
以前、龍王遺跡31区（今報告3区・4区北側：第2図参照）において検出された古墳時代初頭の住居跡を報告（竹中2006）したが、そのことからも龍王遺跡では古墳時代初頭の集落が遺跡内の広範囲に展開していたことが判る。しかしながら、今回の報告の12区～15区付近以外では古代以降の水田造成時の掘削が著しく、ほとんどの区域で遺構が残存していない。31区の住居跡も既存の水田の畦部分にかろうじて検出されたものであり、龍王遺跡全体の状況は推し量ることができないが、相当量の遺構・遺物が存在していたであろうことが推測される。拡張区や「方形の環溝」部分については、調査終了後盛土により保存措置を講じている。

今回報告する住居跡群は調査区ごとに区分けすると3地点に分かれる。12区～15区の弥生時代終末～古墳時代初頭の住居跡群、22区の古墳時代初頭の住居跡群、拡張区の弥生時代終末～古墳時代初頭の住居跡群、である。22区や拡張区は本来保存対象地区であったため、検出面で実測し、場合によつてはトレンチ調査をおこなっている。22区ではSB-1～SB-3が住居跡中央に十字のトレンチ、SB-5は北側半分の完掘、SB-4については検出までとしている。拡張区ではSB-1とSB-2に十字のトレンチを設けて調査を行っている。住居床面までの深さが30cmを測るものもあり、上部が削平されているとは言え比較的良好な残存状況を示している。また、第26図を見ても判るとおり、住居跡以外にも無数のピットや溝等が検出されている。今回は詳しい報告は行わないが、住居跡の検出された部分に比べるとピット群の検出された部分の標高が若干高くなってしまっており、検出されたピット群の多くは本来竪穴住居のそれであった可能性が考えられる。相当数の住居跡が今回の工事による削平以前にすでに消滅してしまっている状況が推測される。また、古墳時代初頭の「方形の環溝」はいわゆる「豪族居館」と考えられ、県内では初の検出例である。以前概要を報告（竹中2006）しているが、住居跡群の一部を切り込む形で検出されており、その前後関係や大量に検出された出土遺物の内容等を後述（第4節）する。

#### 【参考文献】

竹中哲朗・織田健吾 2006『龍王遺跡(倉地川古墳)』雲仙市文化財調査報告書(概報)第1集 長崎県雲仙市教育委員会

(辻田)



第26図 12区～15区・拡張区及び方形環溝構置図 (1/500)

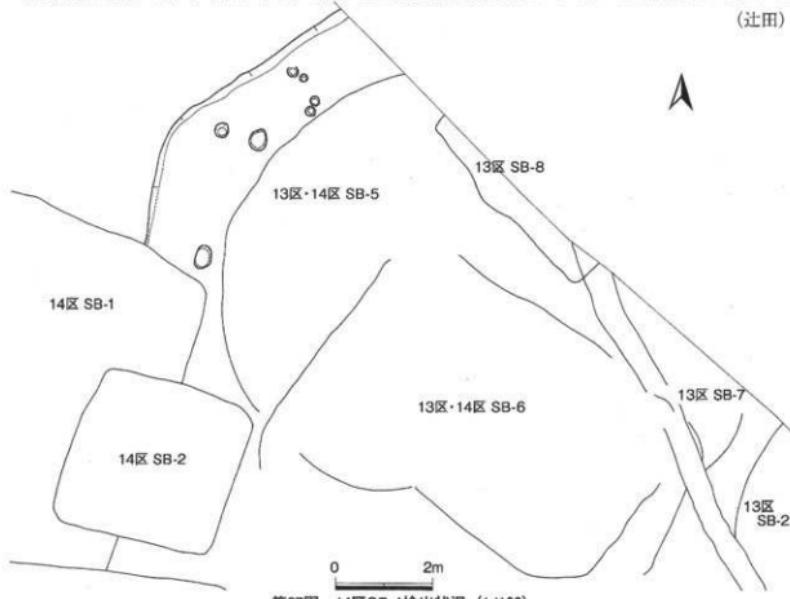
(2) 各遺構の内容 (第27図～第89図 龍王遺跡12区～15区及び5区)

① 14区SB-4 (第27図～第32図、図版4・図版10・図版28)

一検出状況

今回検出された住居跡の中では最も多くの住居跡と切り合い関係を持っており、出土遺物の内容から弥生終末期の住居跡である。住居跡の一部分しか残存しておらず、住居跡全体の構造や平面形状ははっきりとしないが、検出されたわずかな遺構平面をみると円形とは言えず、角を持つ多角形の平面形状を示すことが予想される。大きさについても判然としないが、残存する平面形状から4～5mの規模とは考えにくく、10mに近い規模のものと考えられる。住居の立ち上がりは古代以降の造成によりかなり削平を受けているが、20cmほどを確認できた。まっすぐに立ち上がりらず、やや斜めに広がるような形態を示すが、埋没時の壁面崩落に伴うものと想定され、当時はほぼ垂直に掘り込まれていたものであろう。張床の痕跡や床面の硬化面などは検出されなかったが、多くの土器片等の遺物が張り付くように検出されており、検出された遺物の下面が住居床面に相当すると考えられる。また、実測図にはピット状の遺構が数基見られるが、住居跡に伴うものかは判断しがたい。住居検出時には検出されていないものであるが、住居建設以前のものとも考えられるため今回は積極的に住居に伴う遺構としては扱わない。住居の規模が比較的大きく、13区・14区SB-5や13区・14区SB-6などが重なる部分にまで住居跡が展開していたことを考えると、後述する13区・14区SB-5や13区・14区SB-6実測図中のピット状遺構の中にも14区SB-4に伴う柱穴が含まれていると考えて間違いないであろう。調査時にはその区分ができなかつた。ちなみに、14区SB-5の数m西側には焼土片や弥生土器片がやや集中して検出される部分があり、さらに前段階の住居跡(14区SB-3：後述)があったと想定される。しかしながら住居の立ち上がり等まったく残存しておらず、辛うじて少量の遺物が残存したものと考えられる。このことからも前頁でも述べたが、本来はさらに西側にも竪穴住居跡群が広がっていたことの裏付けにもなろう。

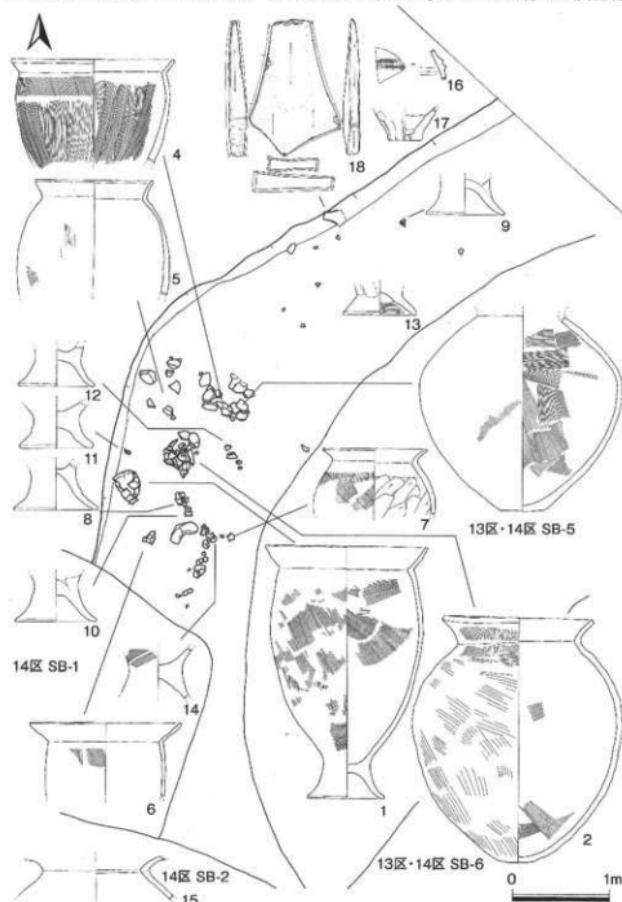
(辻田)



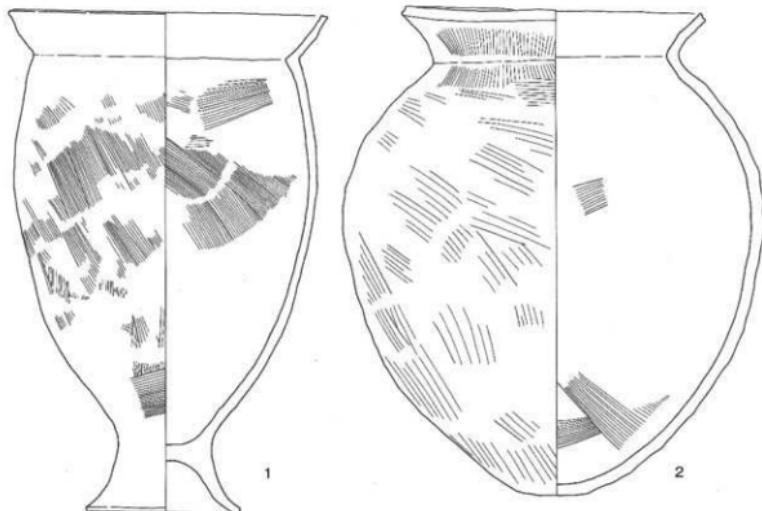
第27図 14区SB-4検出状況 (1/100)

### 一遺物出土状況

住居跡床面直上と考えられる部分から、まとまって土器片が検出されている。実測図や図版などからも判るとおり、ほぼ一個体に復元可能な土器が押しつぶされたように検出されており、住居廃絶時に残された土器片がそのまま出土していると考えられる。また、住居立ち上がり部分の壁面には第32図18の砥石と考えられる砂岩製の石器が張り付くように出土しており、住居壁面の縁に立てかけてあったものか、もしくは住居壁面にぶら下げる等の収納を行っていたことが伺える。これら復元可能な土器片や砥石などは、廃絶時に住居外部にあったものを住居内に廃棄したものと考えられないこともないが、その残存率や出土状況からみると、住居内で使用していたものを住居廃絶時にそのまま廃棄してしまったものと考えるほうが妥当と思われる。住居跡覆土や床面と考えられる部分には炭化材等の検出は見られないため、火災による焼失住居のような住居使用時の状況をそのまま示すものではないが、それに近い時期を表しているものと考えられる。堅穴住居の壁面直下には壁周溝等の遺構が見られる場合があるが、ここでは見つかっていない。住居内の南側には台付窓の脚台部分が集中して検出されており、前述した、住居内で使用していたものを住居廃絶時に不要物と一緒にそのまま廃棄してしまったとの状況を表しているものと考えられる。(辻田)



第28図 14区SB-4遺物出土状況 (1/50)

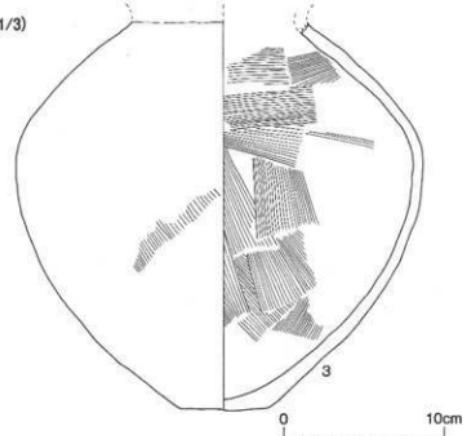


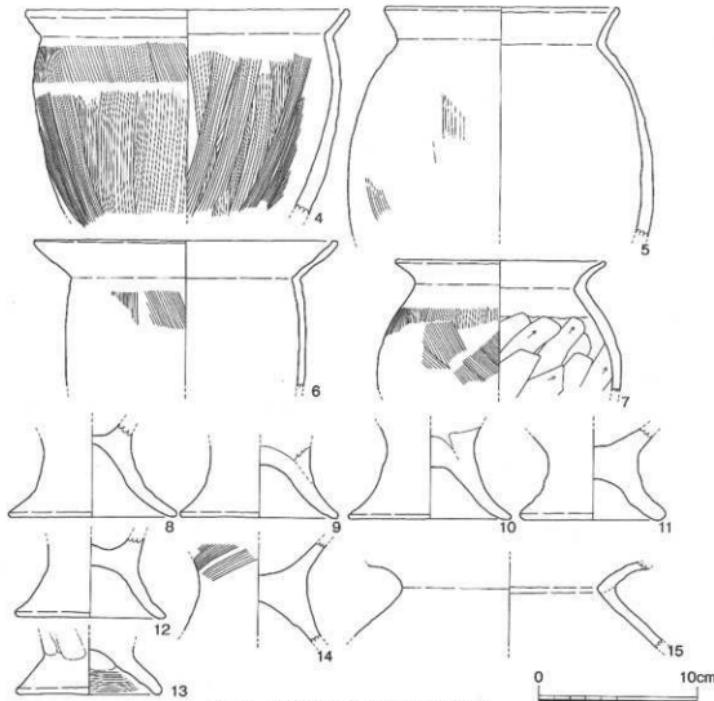
第29図 14区SB-4出土土器（甕・壺）(1/3)

—出土遺物—

甕・壺（第29図）：1は3/4程度に復元された台付甕で器高は30.9cmを測る。脚裾部は復元径で9.4cmを測り、端部が若干「ハ」の字に開く形態を示す。胴部は緩く内湾しながら立ち上がり頸部で若干すぼまる形態となる。胴部最大径は器高の上から1/3程度の部分にあり、復元径で19.9cmを測る。口縁部は頸部から「く」の字に開くが内湾気味で、口唇部が若干厚くなり端部の中央には沈線状のくぼみが一条走る。口径は復元径で19.5cmを測る。胴部外面は縦位・斜位のハケが施され、頸部付近には横位のハケもみられる。また、内面も同様である。

口縁部はハケの後横位のナデにより丁寧に仕上げられている。胴部外面の下半は二次的な被熱により器壁が赤色化しているが、器壁の残存状況は良好である。また、口縁部外面から胴部上半部にかけては吹きこぼれによると考えられる「おこげ」状の炭化物が付着しており、煮炊きに使用していたことがわかる。2はほぼ完全に復元された甕で器高は30cmを測る。底部は若干丸みを帯びるが小さな平底となり、底径は4.5cmを測る。底部より緩く内湾気味に立ち上がり、頸部では大きくすぼまるような形態を呈し、器高の上から2/5程度の部分で胴部最大径26cmを測る。口縁部は頸部より「く」の字に続き若干外反気味に開く。口唇部は断面形状が方形となるが、端部には沈線状の窪みが一条みられる。胴部は内外面ともに横位・斜位のハケが施されるが、器壁の残存状況が悪くはっきりとしない。また、





第30図 14区SB-4出土土器（壺）(1/3)

口縁部から頸部にかけては縦位のハケが施され、口縁部内面はナデにより仕上げられているようだ。器壁はやや厚めで、持った感じはずしりと重い。胴部下半は器壁が赤色化しており二次的な被熱の痕跡であろうか。また、部分的には炭化物と思しき付着物も見られ、煮炊きに使用していたことも想定できる。3は1/3程度に復元された壺で、口縁部形態は不明であるが、残存高は23.9cmを測る。底部は平底となり、底径は5.5cmを測る。底部よりゆるく内湾気味に立ち上がり、頸部に向かって胴部最大径より大きくすぼまるような形態を呈し、「く」の字に口縁部に統く。器高の下から15cm程の部分で胴部最大径25.2cmを測る。内外面とも横位・斜位のハケの後丁寧にナデられており、滑らかな器壁に仕上げている。胴部外面には二次的な被熱痕はみられない。

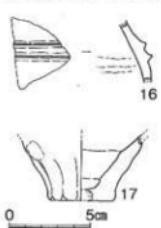
壺（第30図）：4は壺の口縁部から胴部にかけての破片資料で、手のひら大の大きさである。口径は復元径で20cmを測る。脚台が付くと考えられるが底部は欠損しており判然としない。ゆるく内湾しながら立ち上がる胴部で、頸部がわずかにすぼまる。口縁部は「く」の字に直線的に開き、端部は丸く仕上げられている。器壁は厚く胴部内外面には縦位のしっかりとしたハケが施される。口縁部は横位のナデにより丁寧な仕上げが伺える。5は同じく壺の口縁部から胴部にかけての破片資料で、手のひらほどの大きさである。口径は復元径で14.6cmを測る。底部形態は不明だが、やや張り出した胴部に頸部は内湾し、直線的に短く開く口縁部が続く。内外面ともにハケによる調整を施した後、ナデされている。口縁部から頸部にかけては横位の丁寧なナデにより仕上げられている。6は下半を欠損す

るものの台付壺で、口縁部から胴部上半にかけての手のひら程の破片資料である。口径は復元径で18.8cmを測る。ほぼまっすぐに立ち上がる胴部で、頸部でもほとんどすさまらない。口縁部は直線的に開き、端部付近で若干内湾し端部は丸く仕上げている。外面ともにハケによる調整を施した後、丁寧なナデにより器面を整えている。器壁は薄く、胎土も精製されているようできめが細かい。7は壺の口縁部から胴部にかけての破片資料で、手のひら程の大きさである。口径は復元径で13cmを測る。張り出した胴部から頸部はすぼまり、短く外反する口縁部が続く。外面は継位・斜位のハケが施され、後にナデられている。内面は下位からのケズリで、胎土中の砂粒が上方に動いている。口縁部から頸部にかけては丁寧な横位のナデにより仕上げられている。8~14は台付壺の脚台部分である。いずれも壺底部に接続する部分あたりで欠損しており、所々に二次的な被熱により赤色化した部分が見られる。大きさはどれもほぼ同様で、8~12までは脚台裾部が外反するタイプのもので、13は直線的な裾部で若干短い。14は裾部についても欠損する資料である。15は住居の床面と考えられる部分より下層

で検出しているため、住居建設以前に使用されていた遺物と考えられる。壺の頸部付近で、口縁端部は欠損する。頸部で大きくすぼまる形態を呈し、口縁部は大きく開きや外反する。外面ともに丁寧なナデにより仕上げられている。

**壺**（第31図）：16は小破片であり全体の器形は不明であるが胴部片で、2条の貼り付け突帯がみられる。器壁は薄く、器面も丁寧なナデにより整えられている。赤色顔料等の塗布は確認できないが、広口壺などの一部であろうか。

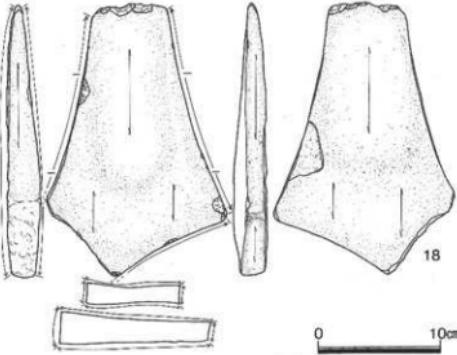
17は壺の底部破片で、平底状を呈す。外面には指頭圧痕により継に縞状の痕跡が見られ、内面はナデされている。また、外面には二次的な被熱であろうか赤色化部分も見られる。底径は5cmに満たず、小型の資料と考えられる。（小野）



第31図  
14区SB-4出土土器  
(1/3)

**砥石**（第32図）：きめの細かい砂岩製で、長軸22.2cmを測る。平面形状は下影れ状のバチ形を呈すが、正面左下は当時の折れにより大きく欠損しており、本来は左下にもう少しのびる形状であったと考えられる。厚さは2~3cmで左下の折れ面と上端の小剥離のはいる部分以外はすべて砥石としての使用が認められる。特に正面の上半部分はゆるくレンズ状に窪んでおり、最も使い込まれた部分であろうか。しかしながら側面や裏面もかなり砥石状の滑らかな表面となっており、全体を使用していたと考えられる。ちなみに裏面についても正面と同様上半部分がゆるくレンズ状に窪んでおり、同様の使用形態が伺える。いずれの面も平らではなくゆるく湾曲しており、鉄器等の研磨に使用したものではないと考えられる。検出状況は、正面先端部分を上にして、裏面を住居壁面に貼り付けるように見つかっている。正面下端が検出されたのは住居床面と考えられる付近であり、「下端が住居の床に接するように壁に立てられていた」のであろうか。それとも、「住居壁面に網等に入れて取納されていた」ものが落ち込んだのであろうか。住居壁面に接していた裏面には錆状の赤茶色土がべったりと付着している。水田床土部分に見られるような赤色化した土壤であり、住居埋没後住居壁面を伝てしみ込んだ雨水等の痕跡であろうか。

（辻田）



第32図 14区SB-4出土石器（砥石）(1/4)